三つの山踏み

67
483

67-483
1200501281709

始

67
483

伊達千廣 三つの山踏み

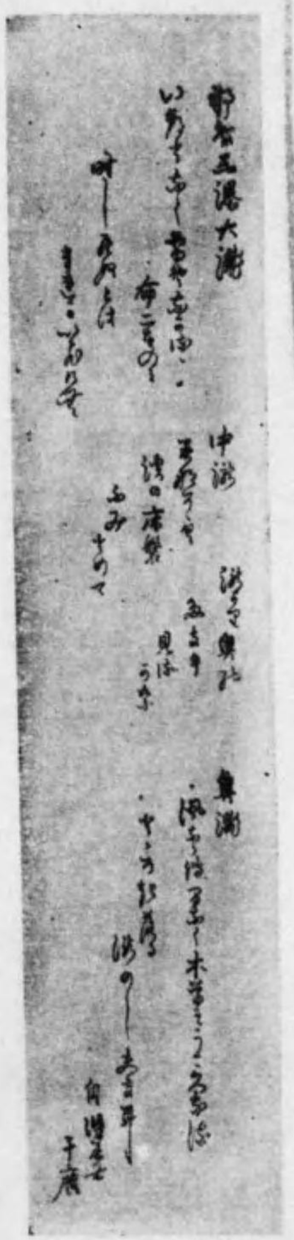
井上豊太郎 註

那智三瀑大瀧　いつとなく雪ぞ流るるふじをのみ時しらぬとは誰かいひけむ

中瀧　みなそそぐ溪の床磐ふみとめて瀧よりおくのたきを見るかな

奥瀧　風ならで間なく木草ぞうごくなるとどろき落る瀧のしぶきに

自得居士千廣



67
483

解題語

井上豐太郎

三つの山踏みわ、伊達千廣が明治三年八月二十五日から同年十一月十六日までの間、和歌山から有田日高を經て西牟婁郡田邊町に至り、田邊から中邊路を經て、熊野三山に詣で、湯峯溫泉に入湯した時の紀行歌文で、三つの山ふみと自題したのわ卽ち所謂熊野三山の意味である。當時千廣わ、其子陸奥宗光が大阪府の權判事として居つた關係で已に大阪市夕陽が丘に住んで居つたのであろうことわ

本文の記事によつて推想さるる事であつて隨つて本來わ大阪からの紀行であつて然るべき筋であるが記事わ和歌山から熊野往復の部分のみに止まつて居る。伊達千廣わ明治十年に逝去して居り享年七十五歳とあるから明治三年にわ齡已に六十八歳古稀に手の屆く年である、千廣としてわその三年前の慶應三年に、同縣日高郡の龍神溫泉に入湯に行つた事があり其時の紀行を龍神出湯日記と名づけて居るが此時とこの熊野三山紀行との兩度が千廣の長いゆつたりとした遊山氣分の旅の最後であり、此二つの紀行文わ卽ち文章として最晩年のものである、千廣にわ、その選歌集として夕日岡月次集が明治四年に刊行されて居つて之が千廣の最初にして最後の選歌集であるが、紀行文としてわ此の三つの山踏みが、最後のものであろう。しかも本文と龍神出湯日記とわ、伊達自得全集にも收められてなく又單行本として刊行されたと云う事もきかない。其に寫本として歌人で千廣の親友である瀨見善水の家に傳わりしのみであつたがその瀨見善水家も今や退轉して跡をたつてゐる。唯本稿本わ幸にして、和歌山縣日高郡御坊町在住元小學校長薗和四

郎と云う仁が傳持して居つたのでそれを借りて寫しとつたのである。

此の三つの山踏みわ、記事として頗ぶる面白く、珍らしい所が多く當時の有り樣を知るの便ともなる點が多い。又篇中にあらわるる人物わ、菊池海叟、岩崎長世、瀨見善水、小竹神官、玉置應章、鳥居某、鈴屋翁、藤垣內翁、楠正主、請川盛鄕、玉置縫殿、水野忠幹、安藤直裕、野長瀨某等、詩人文人又わ史上に由緖ある家の人々が多く、又熊野三山、那智瀧、飛鳥宮、神倉山の火祭り、速玉神社の祭典、就中諸手船一つ物等、史上見遁すべからざる事柄が相當多く記されて居つて心を深めて之を讀む時、神代ながらの日本の古い史實が面前に展開されるわけである。又記事中に草文などと云っ鄙びた俗事の記載されてあることなどわ又なく面白い、又文中に記された所々の多くわ何れも紀伊に於ける萬葉以降の歌枕である。

熊野三山についてわ、古來相當澤山の文人雅客の紀行文が存する、紀州關係の人にあつても北畠麥洲の熊野遊記菊地元習の三山記略等有名であるが、伊達千廣

のこの三つの山踏みわ、頗ぶる簡潔で要を得て居つて、よく出來た文章であると信じる。

伊達千廣わ、幼名守之烝後數馬という通稱藤次郎と云い本名わ宗廣、藩の事情による遠慮から作歌に千廣の名を用いた例が遂に雅號と認められてしまつた由で、老後にわ自得居士と號した、和歌山藩士宇佐美祐長の二男で、享和二年五月二十五日誕生文化十年十一月八日、叔父伊達盛明の家を繼いで知行參百石を祿せられ、同十三年二月十四日小姓となり、文政五年六月十七日目付、同十二年五月十日勘定吟味役、天保元年五月二十七日徒頭格中奥詰、同三年三月十七日小普請支配、同十三年祿五百石、弘化元年八月十日熊野三山貸付方有司總括、同二年紀伊國名所圖繪編修に付古社寺取調方、嘉永二年十月十五日祿六百石、同三年七月二十九日勘定奉行となり大番頭舊の如し次で社寺奉行、嘉永四年二月十四日高七百石增祿、一位殿御用兼帶、同五年勤功により永世祿五百石都合八百石に累進し

た。即ち祿八百石社寺奉行兼勘定奉行大番頭一位殿御用人と云う事で殆ど紀藩の樞機に參與し權威並ぶ者なき有樣であつた。然るに偶々一位公の薨去に會い政敵水野土佐守に沮まれて同年十二月二日幕命と稱して田邊藩主安藤直裕に預けられ蟄居殆ど十年、文久元年六月二日自在公の三十三回忌法要に際し許されて歸藩、舊祿を受けたが、明治維新の風雲急なるに及び又々禁錮の厄を受くる事あり、一時藩を脫して國事に奔走、維新の業成るに及んで全く塵外に立ち、悠々自適の日を送り、明治十年五月歿した享年七十五歳、墓わ大阪夕陽が丘にある。明治の我日本外交史上の大立物陸奥宗光わ實に千廣の子である。

千廣、幼にして神童の聞えあり夙に本居大平の門に學んで國學並に歌文を學び出藍の譽があつた。加納諸平、長澤伴雄、等とわ同門である、千廣が後年科を蒙つて田邊に幽閉せられたのわ固より藩内の勢力爭に累せられた爲めでわあるが一にわ本居門の尙古の思想に指導せられて大義名分の思潮を懷抱したのにも因る次第である、千廣田邊に幽閉せらるる間、一切經に眼をさらして佛敎の眞髓を了解

した後一日京都妙心寺の越溪禪師に謁してその痛棒を喫した、怒り心頭に發したが座禪一晝夜にして豁然大悟した。その時の心境を叙した歌「色にこそ名の數もあれ菊の花香はたゞ同じ香に匂ひつゝ」と云う一首、又越溪禪師が此時千廣に示した四字の偈わ「隨緣自在」とある、千廣後年自已の歌集に隨緣集の名を冠して居るのわこの機緣によるのである。

千廣晩年に及んで其門に遊ぶの徒多く特に瀨見善水の率いる朝陽社の人々わ千廣に歌の批點を乞うた、この外にも亦贄をとるもの少くない、小原實雄、久保田有恒、井上景明らわ千廣門人として其の名高い人々である。

千廣わ、其著述として、大勢三轉考、餘身歸、隨緣集、枯野集、隨々草、和歌禪話、等がある、又紀行歌文として龍神出湯日記及び本文三つの山踏みがあり、選歌集として夕日岡月次集がある。大勢三轉考わ一種の政治的史論であつて頗ぶる卓拔なる意見をもつて我國史の大勢論を試みたものであり、餘身歸わ幽閉十年

間の感懷を叙したるもの、又隨緣集わ其自歌集で面白い事にわ一首毎に諸平伴雄實雄等の批評の語を加えてゐる事である。又枯野集わ其文集である、又隨々草わ、隨筆で、禪と和歌との事について記したもの、和歌禪話わ歌禪一致を說いたもので、之わ佐々木信綱博士編續日本歌學全書中に收載せられて居る、これらの集わ此三つの山ぶみと龍神出湯日記とをのぞいてわ其都度刊行されて居る。が又伊達自得全集にも收められて居る。

伊達千廣の歌わ元來平淡で明朗で淸澄な歌いぶりであるが晩年に及び和歌と禪との一致を說くに至つて全く一家をなし其風他に異色を示して居る。

左に千廣の歌を七首ばかりぬいてみる。

庵結ぶ山井の水はきよくとも心からこそ住むべかりけれ

櫻花もとの根ざしを尋ねずば唯深山木と見てやすぐらむ

山川の清き河内に來て見れば花もみぢとも思はざりけり

山深くうくも咲きけりかくてこそうき世の秋も白菊の花

朝ぼらけ眞神通ひしあと見えて岨の高道をりふしにけり

立ち並ぶ高嶺高嶺を霧の海の小島となして明初めにけり

濱　木　綿

うら清く咲くや此花三熊野の神の御幣とさくやこのはな

尙此紀行の出版わはじめ書物倶樂部の秋朱之介なる仁の希望により私が數多き紀伊古典文獻中より選擇し刊行すべく世間え公表したものである。然るに秋朱之介の書物倶樂部わ直ちにつぶれてしまつたからその刊行を見ずしてやもうとしたが、自分が一度推薦した事故にその責任を果すべく玆に刊行した次第である。

三つの山踏み

伊達千廣記
井上豊太郎註

熊野詣でせまほしく、幾年か心にかかりてありしを、兎角に障る事ありて空しく過ぎこせしを、此の秋俄に思ひ立つ。さるは、春の頃よりいたくわづらひて其の名殘り猶さはやがでありけるを、出湯なんよかるべきと西洋のくすし「ほうとるゐん」のをしへ聞ゆるまま、かくは思ひたちたるなり。人々は險しき山の旅路なるを、老ひたる身の病ひの名殘りもあなるを、いかにあらんなどいふめれど思ひ立つからは。

ふり起こすわが利心のたづが弓ひきはかへらじ山高くとも

妾朝香童健夫ふたりを力杖にて門出す、葉月廿日あまり五日になんありける。夕つけ頃湯淺の宿につく。

註　湯淺の宿　現在和歌山縣有田郡湯淺町

この日、山は名草山、藤白坂、かぶら坂、むかし弓雄が鳴り矢せしと詠めし坂糸我峠、方寸峠。

藤白の御坂に立ちて海見れば松の木末にかゝる釣り舟

賤の女がたぐりにかくる糸鹿山登る坂路は苦しかり鳧

註　名草山　高さ五丁西は名草濱に臨みて紀三井寺三葛あり東に冬野廣原吉原あり南に内原あり北に和田坂田等あり郡中に特立して山脈他に連接なし故に獨名草山の名を負へり（紀伊續風土記）（和歌山縣海草郡紀三井寺町）

註　名草山ことにしありけり吾が戀の千重の一重もなぐさめなくに　（萬葉集）

註　藤白坂　藤白御坂　藤白山の坂をいふなり御坂とは眞坂といふに同じくほめたゝふる詞のみ歌には藤代山の御坂ともよめり景物には多く藤の花および松を寄せたり（紀伊國名所圖繪）（和歌山縣海南市藤白）

註　藤白の三坂を越ゆとしらたへの我衣手はやれにけるかも　（萬葉集）

註　かぶら坂　鏑坂　蕪坂　村（畑村）の西北にあり麓より峯まで十二町熊野道なり（紀伊續土風記）海草郡より有田郡にこゆる峠

註　木の國の昔弓雄のなり矢もて鹿とりふせし坂の上にぞある　（萬葉集）

註　糸我峠　糸鹿山　糸我山　中番村より湯淺莊吉川村へこゆる宮道の山をいふ村より峠まで十四町ばかり（紀伊國名所圖繪）　和歌山縣有田郡糸我村）

註　あで過ぎて糸鹿の山の櫻花散らずもあらなんかえりくるまで　（萬葉集）

註　方寸峠　方寸山　方寸峠城跡　村（吉川村）の南往還にあり吉川栖原兩村領の境なり傳へいふ湯淺權之守宗重初め此山に居城し後青木村に移る國中古城跡多けれども大低皆鎌倉以後の城なり權之守は源平間の人なれば當城は國中にて城を築きし始なるべし。（紀伊續風土記）（和歌山縣有田郡田栖川村）

あくる朝燈もまだ消さぬほどに菊池海叟きたりて語らふ、唐歌作りて見せたればかへしとはなくて。

さやかなる君が袂の秋風をたもとにしめて立ちやわかれん

此日、日高の薗と云ふ處につく。瀬見善水は年久しき友なれば何くれとなく心を盡してあるじす。今日の道にて山は鹿背。

妻どひの啼く音やいづこもみぢ葉もこがれそめたる鹿が背の山

註　菊池海叟　紀伊隨一の勤王家にして又詩人である依田百川撰海莊翁傳に曰く「海莊菊池先生名保定字士固孫輔と稱す溪琴海莊生石皆別號なり紀伊在田郡栖原村の人其先肥後守菊池重朝より出づ重朝の曾孫武行去つて紀伊に隱れ子孫相承け孝友に至り淡齋と號し先生を生む先生人となり豪宕不羈幼にして異質あり（中略）淡齋乃大筐天民に請うて之が師となし先生をして詩を學ばしめ以て邁往の氣を抑へ溫厚の德を養はしむここに於て先生精慮深思詩法に留意す初め宋人を學びつとめて嶄新を主とす自らおもへらく稍以て大方に示すに近からんかと京師に入り賴山陽を訪ふ山陽未だ卷を終らざるに罵つて曰く

聲律の學實竪の及ぶ所にあらず先生赧然として退き遂に仁科白谷櫟川星巖等に遊び研究數年、再び出でて山陽に示す山陽反覆熟讀して曰く又奚下の舊阿蒙にあらず天民亦曰く昔は子吾門人たり今則ち吾却つて弟子のみと幾もなく四方に遊び名儒松崎謙堂、廖嶋松南、齊藤拙堂、太田晴軒、梅辻春樵、佐久間象山、羽倉簡堂、廣瀨淡窓旭莊、野田笛浦、大槻磐溪、等と交を締び詩益工に宋變じて三唐と爲り漢魏六朝となり古奥深遠高華遒逸其海莊集を刻するに及び清人皆評して東方の王新城なりといへり（中略）先生去つて京師に遊び志侍と往來しひそかに復興を謀る明治中興車駕浪華に幸す先生人をして書を上り時務を痛論するもの三十二月刑法總裁大原重德旨を承けて先生を召す先生馳せて京師に入り政事の得失を面陳す重德涙をふるつて曰く人皆勢利にはしる其言至誠に出づる者獨り先生あるのみ（中略）七年内旨勅を賜うて曰く勤王忠を致す積年勞あり因て菊花章及銀幢金帶を賜ふ特に士族に列す故藩主賜うに二印を以てす曰く萬古清風曰く乾坤正氣よく先生の志を謂得たりと云ふべき也。十二年兒孫を携え東京に至る諸勳閥巨公其名を聞き爭うて之を延見せんとす三條實美、岩倉具視公特に召して座を賜ふて以て時勢を問ふ、先生遜辭敢て答へず詩を以て献ず中に云ふあり「春前人は競ふ鶯花の色雪後誰か持

す松柏の心」と遂に出でず越えて三年正月淺草の寓居に歿す時に年八十有三。先生著す所無慮二十餘種六百四十餘卷。其溪琴山房集海莊集最も世に行はる（中略）孫武貞晩香と號し學漢洋を兼ぬ（下略）

註　日高の園　現在和歌山縣日高郡御坊町大字園

註　瀨見善水（よしな）　歌人加納諸平の柿園詠草拾遺の編者である日高郡誌所載略傳左の通り

瀨見善水　文化十年正月八日江川（和歌山縣日高郡丹生村江川）に生る父を善隣といひ母は小池氏善水は其次子（長男）なり（中略）少時士涓の號あり壯年烏獄山人と號し老後翠巒と號す、其居は山靜日長居また寧靜居、三香廼舍とも云ふ、少時和歌を伊達千廣及び加納諸平に學ぶ、其家累代造酒を營み地士及び大庄屋職を世襲して一鄉の名門たるを以て日高の地を過ぐる者、就いてとはざるなく伊達千廣の如き嘗て久しく同家に客たり善水と相許すこと最も深し（中略）明治二十五年一月十三日江川の實家に歿す享年八十遺稿三香廼舍集七冊あり刊行せんとして逝き遂に果さず、其詠鶴玉集等に出づ

註　鹿ケ背山（ししがせ）　鹿瀨山　在田日高の郡堺に在り熊野街道に跨る村（河の瀨村）より登り廿一町ばかり鹿瀨の名始て庵主及び元享釋書に見えたり山の形鹿の背に似たるを以ていふなるべし山中に古城趾又法華壇といふ所あり（紀伊續風土記）

ししのせ山にねたる夜鹿の鳴くをきゝて　　增基法師

うかれけん妻のゆかりに背の山の名をたづねてや鹿のなくらん（庵主紀行）

夏の頃藤井よりかえるさ鹿背山をこゆとて　　加納諸平

いくばくの穗串させとか郭公（ほとゝぎす）しゝのせ山に夕さらずなく（柿園詠草拾遺）

共に行かむと契りし岩崎長世がおくれたるを待つ程に一日二日ここにとまる。朝陽社といへる一部（ひとつも）はおのれが敎え子なれば寄り來て近き浦邊に逍遙す。こを田井の濱と云へり汀の松陰に莚しきさざえわりごなどとりおのおの人々歌よむ。稍暮れゆくままに見わたし殊によし。

夕庭に海人のいざり火見渡せば星は波間のものにぞありける

北にあたりて日の御崎あり此崎に岩ありかゞみ岩といふ。

日の御崎光りくもらぬ鏡岩よる年波の影うつし見ん

かやうの事書きつけんもまさなきわざなれど語らひ草の料にとて。

註　岩崎長世　歌人にて堺住吉神社の神官たりし人詳細未考

註　朝陽社　瀬見善水を中心とする歌の結社　鹽路和種西言知瀬見善禮川瀬廣隆小竹昌安古屋菅賢江川秀守豐田豐延下津義質玉井梶木下常枝小川清尋鹽路有隣小池眞景などわ

何れも朝陽社門の歌人である

註　田井の濱　現在日高濱又わ煙樹濱と云う又和田の濱とも云う濱の瀬より本の脇の磯にかけての濱一帶を指す、（和歌山縣日高郡松原村及和田村の海濱）むかしわこの濱を田井の濱と呼んだらしい、田井わ松原村大字田井

註　日の御崎　村（三尾村）の坤坂道二十三町斗に在り一郡の西南の隅にて南海に突出せる出崎なり又比井の御崎とも云ふ東南は市江崎を見るべく北は加太浦の友ケ島を見るべし故に一國沿海の大概を察すべし（紀伊續風土記）（和歌山縣日高郡三尾村比井崎村）

註　鏡岩　比井御崎の鼻にあり高さ十六間周三十二間朝日の出づる光此岩に映じて鏡にうつるが如し故に鏡岩と云ふ（同上）

廿九日ここを出で南部(みなべ)にやどる。朔日田邊(たなべ)に至る。此間の浦に濱木綿の生ひたるが道もせに隈き合ひたり花の比(ころ)ならましかはいかにをかしからましを。やどりにつけば熊代繁里小川目良三柳など出で來て語らふ。

註　南部　和歌山縣日高郡南部町、南部驛　みなべの浦潮なみちそね鹿島なる釣する海人をみてかへり來む（萬葉集）

註　田邊　和歌山縣西牟婁郡田邊町。田邊城下　此地秋津川の海口にありて古の牟婁の津なり（紀伊續風土記）

註　濱木綿(はまゆう)　三熊野の浦の濱木綿百重なす心はおもへどたゞにあはぬかも（萬葉集）ヒガンバナ科に屬す花わ眞夏に咲く白色。みな月の日の眞盛りに咲きにけり眞砂が上の濱木綿の花（加納諸平）

註　熊代繁里　歌人。櫻蔭集及び類題清渚集の撰あり其略傳わ左の通り。

櫻蔭大人之奥津城　本居豐穎撰

わが櫻蔭熊代繁里大人の遠つ祖は甲斐源氏より出づ、繼ぎつぎて此三名部の鄕に住み給へり、幼き時ゆ、皇學に心を寄せ初は山内繁樹翁の敎子となり、其後由あり流名高き人々にも交らひて書はしみらに家の樣をつとめ夜はすがらに書よみ、聊かも他事をなさず、遂にこの道の奥所をきはめ著せる書も最と多にして其御名を轟し給ひぬ、故に皇朝の大御言もて、熊野に坐す大神の權の宮司に任ぜられ中講義さへ加へ給ひ、家の光りを輝し給へるからに敎へ子らは更にも云はず世の人皆も仰ぎ尊み千代にもかと祈りしに、今年の六月五日の日ゆくりなく病おこりて五十餘り九つと云ふ齡にて世に亡き人の數に入り給ひぬれば家の嗣子秀里又敎へ子等相謀りて此所を奥津岐と定め泣く泣く葬り祭りぬるになん（明治九年六月八日）

註　目良三柳　通稱純齋と號し累世醫を業とす（中略）性淡泊順正小事に拘泥せず、晩年陶潛（陶淵明）の行義を慕ひ、小暇を得れば詩文を作す、作る所若干家に藏す。（熊

野雜誌）

三日ここを出で芝高原など云ふ處をすぎて近露にやどる。今日の山ぶみは汐見峠、十丈峠、逢坂峠、すべて山なれば盡くは覺えず。逢坂こゆる程に萩の叢々と咲き亂れて一谷に匂ひみちたるが目もあやなれば暫し見つゝ。

花つまはみだれてあれど荒垣に鹿や詫ぶらん逢坂の山

註　芝村　眞砂村の長廿五町にあり乾の方三栖の里より潮見峠を越えて當村に來るを中邊地街道とす（紀伊續風土記）（和歌山縣西牟婁郡栗栖川村）

註　高原村　芝村の東登る事三十四町栗栖川の東にありて中邊地街道の驛舍なり（右同）

御鳥羽院熊野御幸に濕尻玉子にて和歌御會に峯に照る月と云ふ題にて

因幡守　道方

高原や嶺より出る月影は千年の松を照らすなりけり（紀路の歌枕）

註　近露（ちかつゆ）　現在西牟婁郡近野村大字近露。栗栖川莊高原村の東二里十一町にありて熊野街道の驛なり。小名桐坂峠は本村の西熊野往還にあり。（紀伊續風土記）

近露の里に寢ざめして

加納諸平

驛長竹の小筒をふくからに山の峽（かひ）こそ聲あはせけれ（柿園詠草）

註　潮見（しほみ）峠　槇山、栗栖川岩田三栖秋津の四莊の塔にありて高さ二里ばかり廻り十里に餘ると云ふ山峰の巽の方に山の足を引きたるを潮見峠といふ潮見より西の方十八町に檢木嶺あり檢木より潮見に至るまで横山の半腰に一線路を開きて中邊地の街道とす（中略）此地を潮見峠といふは本宮の方より來るもの此地に至りてはじめて滄海を望むを以てなり（紀伊續風土記）

註　十丈峠　十丈嶺　大内川村と栗栖川村福定村の堺に在り熊野街道なり（同上）

註　逢阪峠　相坂峠　大阪王子碑　相坂峠にあり往還の側の森にして社なく碑を立てて銘に大阪王子と記せり御幸記に大坂本の王子とあり（同上）

今宵の宿り鳥居良兒は知る人なり。今度の山ぶみをききて必ず宿るべくありしかばここに草枕結ぶなり。またこのうしろの山に、玉置應章がおくつきありこはらからのやうに有りしものなれば往きて手向けす。夜もすがら語らふ程に、あるじ掛け物を持ち出で此箱に物かけと云ふを見れば鈴屋翁の今様に藤垣内翁の證（あか）しの今様なりいと珍らかに愛でたき筆の跡なればいかでといへど免さねば其箱に書いつく。鈴屋翁の今様は――。

世のうき事はのがれすむ柴のあみ戸もさすがまた嵐の音の身にしみて都戀ひしき山の奥

藤垣内（とうかきつ）の翁のは――。

世をのがれすむ柴の戸も都戀ひつゝ明けくれにきくや嵐のさびしさを此今様にしらせけり

此箱に――。

世をのがれてもかくれなき柴のあみ戸のあかしぶみさやけき聲にこゑそへて外にあらしのふくうたや

註　玉置應章　玉置經殿の子惣太と稱し熊野三山貸付所（大阪勤務）であつたが父に先つて近露に客死したる故に墓がこの所にあるわけ但生歿年未考。

註　鈴屋翁　本居宣長　藤かきつ翁　本居大平　千廣の師である。

四日朝朗にここを出づとて。

丁よぶ貝の音ながら霧こめて山ふところはしらむともなし

此日。山は小廣峠女夫坂岩上峠三越峠すべて高き山路にて登りては降り降りては登る。女夫坂といふは女坂を下りて男坂にのぼる此間の谷に一つ家あり媒茶屋と言ふもおかし。今日の山路にては殊に苦しき峠なり。

越えわびて思へばいでや世の中にかたきは女夫の道にぞありける

伏拜といふ處まで人々出迎ひて本宮にいたる。やどりは二階堂某が家にて音無川はたゞこの垣の外なり今日も雨ふりて山路わびしかりしを夜もすがらやまず常

は水少き川なりといへど雨によればや水の音枕にひゞきて夢をやぶる。

さゞれこす早瀬の水の鳴り高しいづく名にきく音なしの川

註　小廣峠　小廣王子碑　村（野中村）の東道湯川村堺小廣峠にあり　道湯川村　野中村の東二里にあり西は小廣峠を村境とし、東は三越峠を以て熊野口奥の境とす（紀伊續風土記）

註　女夫坂　草鞋峠　岩上峠の西にあり世俗此峠と岩神峠とを合せて女夫坂といふ熊野往還にて第一の險路なり（同上）

九月二十一日めをと坂を西にこゆとて　加納諸平

たか中の秋の別れにならふらん女坂男坂もしぐれふるなり（柿園詠草）

註　三越峠　村（道の湯河村）の東坂道峠まで八町三里郷堺に在り俊頼の歌に見み

中宮亮仲實熊野へまいりけるにつかはす

俊頼朝臣

雲の居る三越岩神こえん日はそぶる心にかゝれとぞ思ふ（散木集）

註　伏拝（ふしおがみ）　一本松村の北九丁にあり中邊路街道に散在す南は乳古良石を限りて本宮村と

堺す昔和泉式部此處にて本宮を伏拝しより此名おこるといふ（紀伊續風土記）

註　本宮（ほんぐう）（和歌山縣東牟婁郡主里村）四村莊請川村の乾十八町にあり社家村中に住し

村中大中皆神宮に奉事する家にして自ら市街をなし岩田町本町新町鳥居地上町等の名あ

り皆往還一條の町なり總て九町半なり此村古は音無の里といふ音無川村中を流れて村居

川に傍ふ音無の里古歌あり。（紀伊續風土記）

本宮にやどりける夜

加納諸平

なゝこしの峯に夕ゐる秋の雲一なびきして月はのぼれり（柿園詠草）

註　音無川　三越村小名道川といふ處より流れ出で一本松を經て本宮村に至りて熊野川

に落合ふ音無の里は今の本宮村なり音無川はひろく此邊の川をいふ何れも古歌多し。（紀

伊續風土記）

秋の歌の中

民部卿爲家

音なしの里の秋風夜を寒み忍びに人や衣打つらん（夫木集）

源有房朝臣

松やあらぬ風やむかしの風ならぬいづれの秋か音なしの山（同上）

忍びて懸想しける女のもとにつかはしける

清原元輔

音なしの川とぞついに流れ出るいはで物思ふ人のなみだは（拾遺愚草）

あくる朝。大宮に詣づ打橋わたりてまうのぼる程に神さびて尊し十二の宮居いこよかに立ち列び給へるめでたしなどいはんも更なり年頃の願事今日かなひぬ御神樂奉りて大前に額突きつゝ。

畏さに又何事か申すべきたゞ君が世を安かれとこそ

又高倉下の御社に。

いましめのよしありとても國民を助くるわざは神もみちびけ

かく詠るは此處にくさ〴〵の禁あり。正しくいつの世よりといふ事もさだかならでかく習し來れる中に民どもにいとたよりよからぬ事あり。其一つ二つをいはゞ牛に荷負する事をゆるさず蚕養する事をいましむなど尤も便あしき限なり。殊に牛荷は此あたりのみならず藤白は熊野の一の鳥居なりとて夫より南有田日高の兩郡も牛に荷を負す事なし此習いと上代の事とも覺えず思うに中昔佛法盛にして社家といふも多くは僧侶なれば慈悲の餘りにてさる禁制も出でしか。此一條の論は往年日高なる龍神の出湯へ行きし時此事を歎きてはやく其紀行に委曲にしるしおきたれば今はいはず。しかはあれど中昔の世に藤白の御社を始として九十九王子の御社纒々に立ち榮え其間の人民仰き崇へしさま此一件にても思ひやらる。さはいへ今かく文明の御世としてさる禁を立て置かん事は琴柱に膠し舟を刻むにひとしく愚にかたくなるわざなればかゝる禁をとどめむ事ぞ中々に神の御心にも叶ふべく思ひつゝ神宮の人々に勸るよしもあればかく詠て地主の神に祈り乞しな

り。

註　熊野本宮の宮居わ、俗に十二社様という、舊き宮居わ明治二十二年の大洪水に押し流されて、現在わ假宮である、流失以前の熊野に坐す大神鎮座の姿わ、紀伊續風土記に大略左様に記されて居る。

本宮十二所權現

第一殿　證誠殿　家都御子大神　伊非諸尊　伊非冉尊

第二　聞社合殿　西御前　熊野夫須美大神　熊野速玉大神

第三殿　若宮　天照大神　國常立尊

第四四社合殿　中四社　忍穗耳尊　瓊々杵尊　彦火々出見尊　葺不合尊

第五四社合殿　下四社　軻遇突智尊　植山姫命　岡象女命　稚産靈神

右第一殿を證誠殿、第二殿を西御前、第三を若宮と稱し又一殿二殿三殿を上四社と總稱す第四殿を中四社、第五殿を下四社と稱す是を合せて十二所權現と稱す十二所權現の稱は三山共に同じけれども當所下四社祀る所の四坐の神は那智新宮と異なれり。

摇社末社　八百萬神社　滿山社とも云ふ

四神相殿社　祀神　底海社　市杵島姫社　瀧姫社　八咫烏社

地主社　祀神　高倉下命　穗屋姫命

音無大神社　祀神　少彦名命

御戸開社　祀神　素戔嗚尊

日月星拜所　玉置社遙拜所　大三輪社遙拜所　別當　產田社石寶殿　後白河院御歌塚

和泉式部歌塚

註　高倉下命　神倉神社の項參照

註　龍神出湯日記　伊達千廣慶應三年九月龍神溫泉に遊びたる折の記行龍神出湯日記中に前叙の事を記す。

此宮の後の方に巴が淵といふあり熊野川音無川岩田川の三つの流の落合ひ也。

ものの夫の手にまく鞆の三つあひによりて仕ふる山川ぞこれ

註　巴が淵　熊野川音無川岩田川の三つの川合流の所をいふ　岩田川村の南の小谷をいふ（紀伊續風土記）

此日湯峰にいたる。本宮より廿五丁小栗が車塚といふ山路を越えゆく湯峰は山ふところにして聞しにまして物乏き處なれど名におふ出湯のしるしあれば國々より病者ども來りて絶間なく旅やどりの家ども怪しうもあらずしかすがに賑ふめり。湯は溪川よりわき出で水とともに流れ行く奇しく靈しきものなりけり。我やどりは東光寺といへりしが近頃佛を外にして潔齋所といふにやどる。軒端より山にして瀧あり此瀧の岩間よりも湯の湧き出づるを筧して湯舟にながし入る湯と水との筧並びて冷暖心のままなり。

ここにありける程詠めけるうた。

朝ぼらけ瀧川つたひ石ふめば足やくばかり御湯ぞわくなる

澄みわたる湯舟の夜にうたかたの漂よふ見れば花ぞ匂へる

瀧つせのしぶきも湯氣も吹き入りて濕りがちなるねや莚哉

寢屋莚（ねやむしろ）と言ふは此山奥に言ふ詞なり。

賤の女がかくまの廿菜瀧川に洗ふと見れば烹（に）るにぞ有りける

朝な夕な物烹る見れば谷川の湯筒は里のかまどなりけり

湯筒と云ふは瀧川の中にわき出る湯を岩また板もてたゝへたるなり。七日の日は風荒く吹き雨烈しくふりてたゞならぬ雲のけしきなり瀧の音雨風の音どよみわたりていとさはがし雨もり風吹き入れば草枕結びもあへずやう〳〵明け行くほどに本宮あたりは大水出で家のうちにも水こみ入りて大かたならぬ荒れすさびなりときくも心安からず庭の瀧は水まして狹き岩間に白波をひるがへして流るるさま面白し。

眞白木綿(ゆう)みだれて落る瀧つせは岩裂く神の天津領布(ひれ)かも

朝毎に眼覺ればおり立ちて湯舟を見るに霧なす湯氣の香り滿ち溢れ流るる湯舟の仲に足さしのばへて浴たる心地妙觸宣明とは斯るをやいはん。畫一度夜一度一

日に三度浴む大方の人はあまたたび浴むをよしと思ひて七度八度と入るもあれどしか屢浴るものならずとほうとるんに敎られてありければ三度とは定めしなり。

註　湯峯溫泉　又本宮の湯といふ浴室一宇三槽ありて留湯男湯女湯といふ三に分る槽各方二間ばかり外に乞食湯一所あり湯は方一町の内數箇所に湧き出づ其最熱泉の湧く所三箇所あり其内浴室にとる所二箇所なり一は東光寺の後より出づ極熱にして觸るべからず其傍冷泉湧出るあり各長筧を以て之をとる下に至りて二の筧を合せて一となし溫熱の加減を調適して浴室の槽中に注ぐ事懸泉の如し是を留湯といふ一は澗底より沸騰する熱泉なり注管を其中に立つ沸勢盛なるを以て直ちに管中に入りて騰る事二丈ばかり上に長筧ありて是を受く又傍に一の長筧冷泉をひくあり二の筧を合せて一となし冷熱を調適して浴室中に注ぐ事前の如し分れて二となる一は男湯とし一は女湯とす（下略）（紀伊續風土記）

註　車塚　湯之峯入口に在り俗傳に云ふ昔小栗判官兼氏と云ふ人常陸國の生れにて鎌倉

に居住して相模國を領すとかや永享六年の春毒酒に當り癩病となり苦しみけるを其妻照手姫是を車に乘せ來りて此湯に入れたり本服して歸りには其車を捨てける所を名づけしといふ（紀伊國名所圖繪稿本）

廻る日の草はあたらし車塚　燕志

註　東光寺　藥王山東光寺　眞言宗　本尊藥師如來　行基の作　開基役の行者　堂宇は豐臣秀吉公の御建立と云ふ（紀伊國名所圖繪稿本）

此間。本宮より知る人日毎に訪ひ來て語らへばさびしき事もなし。歌書けと云へば一つ二つ書きてとらする程に我も我もと懷紙短册もち來る書き終れば持ちくる持ちくればかく老ひしれてよき歌も詠えず文字書く事はもとより拙し書きたればとて何にかはせんたゞ山里にて物めづらしく思ふなるべし餘りに多くて物書くにこしやうなり。

冬の來て嵐の誘ふ梢かは散らす言葉のひまなかるらん

すりながす硯の池に水鳥の數かきわびて今日も暮しつ

うめき出したるがおかしくてひとり笑ふ。本宮なる楠正主が橘園の歌をと乞へるに、此園を橘もて名づけし故由をいかにと問ふに此家主は正成朝臣の御末なればと答ふるを貴み是に感けて壽く歌。

香具の實の世にかぐはしき氏の名をおひし此園常盤かきはに

楠の千世經ていはとなるまでも立さかえなむたちばなのその

註　楠氏が熊野連の系統より出でたるや否やについて一部の者の間に調査の歩を進められ居るとの噂のある事を筆者わ近頃耳にして居る。

請川盛郷が扇園の辭。

熊野別當湛増軍に功ありて其所の野に生たる小松を扇にのせて賜りしとなむ。此古事いつの時いづくの軍戰といふ事定かならねど此族の家のしるしに此事殘りて今猶扇に松の字を用ふとなり、いでや星移り物かはりて大かた古事の傳は遠山の春の端の雪跡なく消え秋の田面を照す稻妻尋る方もなき例多かる中にかく家のしるしに其事とどまりて松の葉の散失せず遠祖の功勳をあふぐ事はいといとめでたき例にして此園の名に呼べるも宜なるかも。

名に高き野邊の小松の千世のこゑ扇の風に傳へけるかな

註　請川盛郷　本宮の神官であろうと思わるるも詳傳未考。

またここにあるほど詠めたる歌。

夜な夜の寢覺に雨とまがひつる瀧の響も耳なれにけり

湯ぎり立つ軒端の山は朧にて影あたたかに月ぞ匂へる

耳洗ふ瀧のひゞきを枕にて浮世にかよふ夢はさめけり

猶あめれど忘れたり。ここに一まわり湯あみして十二日に本宮に歸る。今一まわりもあるべきを此長月の十五日新宮の大御祭なればそれ拜まむとて今日なんか

へりしなり。

十三日熊野川をくだるとて舟にのる。此舟に乗れば水をかくる習ひとて送りこし人の川水を掬ひてけしきばかりうちかけたるもおかし。新宮まで九里八町が間面白き處いと多し四十八瀬といふは水ゆく川の山にあひては曲りゆく其曲る所瀬々にして岩打つ白波立ちさわぎ舟のくだる事坂を走る車よりもとし此川隈を過ればいとゆたかなり一瀬一瀬にてあるはそばだてる岩山あるは杉檜のむら立たるあるは平かなる河原など景色さまざまなり川のこなたかなたに村ありて一つ二つ三つ四つわら屋の見えたるすべて唐畫を見るがごとし。

熊野川八重山並のたゝずまひめぐる瀬毎に立ちかはりつゝ
行く水を山もてせくと見えつるは肱をる隈の早瀬なりけり

見たるままぞかし。藤垣内翁のいはれしやう凡そ海山の大けく廣けき景色にむかひては其片はしも詠むる事かたきものなり。いはむやよき歌をやさるを目を閉ぢ手を組みていかでよき歌詠むと念ひてあたら景色もよそになりてつひに歌を詠めえざる如きいとあやなきわざぞかし。かゝればたゞけしきの實を失はざるやうによみて必ずよき歌をと思ふべからずと敎えられしなんうべなる事なりける。

徳田六郎と言へる能の大夫あり。已れわかき頃これに舞を習ひけるが是が言ひけるよう晴なる時かならず我舞をよく見せんと思ひ給ふべからずたゞ何がしが敎へ申しゝまゝに足一足も踏違へじと心散らさず舞ひ給へと敎へたりしこれも同じ理なり。

禪觀の工夫も煩惱に勝んとせば其かたんと思ふ一念やがて煩惱となりて益煩はしたゞ煩惱なからんやうに工夫すべきなり。大方世の中の事もさるさまにやあら

む餘りにきためては形こそ掟にも隨ひ順ふやうなれ心まではなびきがたくて蛇の竹筒に入たらむごとくなるべし閑話はさてやまん。かゝれば今もたゞ實を違へじとてありのまゝなり。

註　新宮の大祭　新宮速玉神社を云う。

註　熊野川　九里峽　牟婁郡中第一の大河なり源二あり一は大和國十津川より來り一は大和國北山莊より來り花井(けゐ)莊に至りて合ひて一となり新宮に至りて海に入る流るる事總て三十四五里舟楫通ずる所十津川まで十六里北山川まで九里餘三里四村淺里三村花井入鹿四山北山大野谷尾呂志新宮四箇十二莊を總括す其枝流の熊野川に落合ふ大なるもの三つあり上にあるを筌川といふ其源四村莊靜川村に發して流るる事六里ばかり請川村に至りて熊野川に落つ舟楫通ずる事四里ばかり筌川の下にあるものを小口川といふ其源小口川莊瀧本村に發して流るる事九里許り三村莊に至りて熊野川に落つ舟楫通ずる事七里餘小口川莊其左右にあり小口川の下にあるを大野川といふ源は大野莊藏光山より出で流る

る事四里餘鮒田村に至りて熊野川に落つ舟楫通ずる事二里ばかり其餘枝流の小なるもの數ふるに暇あらず。（紀伊續土記）

島かくれ吾こぎくれば乏しかも大和へのぼる眞熊野の舟　（萬葉集）

熊野川下すはや瀨のみなれ棹さすがみなれぬ波の通路　（新古今集）

註　本宮より新宮までの熊野川の行程九里八丁故に九里峽と云う。

此間名ある岩は鮨卷達磨陰陽鈞鐘佛眞魚箸庖丁猶あるべし。揚枝と云ふ處に世に名高くいふ大佛の三十三間堂の棟の柳を伐し時貝吹て人をつどへし岩なりといふもあり。瀧は白糸布引爽三重白雪などあり四目山といふは險しくすさまじき岩山四つ並びたちたる處なり。九里八丁が間にては殊にめづらかに面白き處なり恭

の四目に似たればしか呼ぶと云へれどいかゞあらん思ふに四つ峰と言へるがつゞまりて四つめと云ふ四つめと云ふにつけて四目の字を當てたるなるべし。水早ければ新宮にはてしは未の貝吹くばかりなり。ここにも知る人出で來てねもごろにあるじすやどりは大宮の御門の前なる家なり。

註　楊枝　村の西の方山の尾に高さ三間餘りもあらん臼を重ねたる如き岩有り是を貝吹岩又は貝鎌倉といふかの昔し棟材を出せし時此岩の上にて貝を吹いて人夫を指揮せし所とぞ土俗の傳也（紀伊國名所圖繪稿本）卽ち此村にあつた柳の木をもつて三十三間堂の棟木とした事から生れた（悲劇の）傳說に關する故事である此楊柳傳說わ三十三間堂棟木の由來を參照され度い。

註　新宮　此地熊野川海口の南の岸にして奥熊野の内に在りて平坦の地なり東は海に面し西南は三輪崎村及び淺里鄕と接し其廣袤大低方一里半許り新宮城北の端にありて熊野

川に臨み士邸市廓は城の西に在り權現宮又其西北の端にあり村落其内に交る。（紀伊續風土記）今新宮わ市である。

熊野新宮にてよみ侍る　　中原師光朝臣

天くだる神やねがひをみつしほの淡にちかき千木の片削（萬葉集）

後鳥羽院熊野にまゐらせ給ひける時新宮にて三首言上に庭前殘菊といふことをよめる。

霜おかぬ南の海の濱びさし久しく殘る秋のしら菊（拾遺愚草）　　定家卿

十五日御祭。神輿わたる。此所の知事殿より警衛とて鐵五十人鐵砲五十人出づ

いといかめし十六日も御祭あるべきを雨ふりぬべき空とてやむ十七日又雨風烈しく熊野川水出づかの七日の洗ひにもまして天地も動くばかりなり。此浦べをはじめ遠近の浦に年老ひたるも覺えぬばかりのあからしま風吹きすさび高波陸に打ちあがりて三輪が崎あたりは濱邊なる家ども數しらず波に碎かれて行方もしらずなりぬなどいふ漸く靜まりしかどこの荒れにて御祭も一日ふた日と過ぎゆく程に近きあたりの社に詣づ。

註　新宮　熊野速玉神社を云う此社わ熊野三山の一つで紀伊續風土記に左の通り記されて居る。

新宮十二所權現　當社は本宮那智と鼎立して三山と稱し祀る神を十二所權現といふ然れども十二所權現を祀る事はやゝ後の事にして其初三山共に古く鎭まり座せる三座の神を祀るそは延喜式に載する所の熊野座神社名大神熊野早玉神社大神にして本國神名帳に載する所の正一位家都御子大神正一位熊野夫須美大神正一位御子速玉大神とある三大神是

を佛模樣に三所權現と稱す（下略）

祭式　毎年九月十五日を中御前の祭日とし翌十六日を西御前の祭日とす（下略）

神倉は高倉下命なり。登る坂路いと險し石疊壁なす立ちて面をふさぎ額にふる心地もぞする、紀に見えたる天の磐楯とて楯なす大岩によりて御社あり其前にいと廣き拜殿あり岩根木立物さびて神代もかくやといと尊し。

肇國の其かみよりや萬世をかねてこめけん神倉の山

大八洲國の御鎭め御守りとかみさび立てり天の磐楯

此社に年毎睦月六日の夜御祭りあり遠近より願事あるもの集りきて年毎に松ともして此拜殿に屯む幾百人と數へもあへず松の火を振り立つれば殿間さながら火

となれどあやまちていささかも燒たる事なしといふ。かく祭り終りて坂を走り下るかの壁立つ石疊を幾百人後れじとはせ下れば足の踏む處もさだまらでたゞ飛ぶが如くなれど是も又あやまちて倒れ疵など受けたるものなしと云ふ。神事は猶かしこかりけり理の外なる事なんある。さて其跡にて拜殿殊の外動搖みわたるこれは天狗の集り遊ぶなりとぞ年毎の事にして更に空言にあらずといへり。

註　神倉山　神倉社（かんのくらやしろ）　祀神高倉下命　神倉山にあり此山は櫃現山の南端にして怪巖聳え社殿は其半腹にて麓より石階を登る事二町ばかりにあり本社と並宮は巖崖の内にあり拜殿は懸作りなり。當社祀る神は熊野の高倉下の神にして神武天皇東征の御時に神劍を獻れる事古事記日本記に詳にして神系は舊事記天孫本紀に載す（紀伊續風土記）

註　日本紀　神武天皇熊野に幸し給へる條に且登天磐盾といふ文あり（同上）

熊野にまうで待りける時かんのくらにて太政大臣從一位きはめることを思ひつゞけてよみ待る　入道前太政大臣

三熊野の神倉山の石たゝみのぼりはてても猶祈るかな（續古今集）

註　俗に此祭りを火祭と云い有名である。

いでや天狗といふもの諸越には此部類少きにやをさ〳〵物に見えず。佛經にも夜叉吉鹿など並べいへる中に天狗と云ふ名は見えずたゞ地藏經に此名ありし樣に覺ゆれど其外更に見當らず。御國にても上つ代の書には見えざるを中昔の比よりいと多かるは智力ある僧の我慢つよきが天狗になるといふめれば中昔佛法熾盛の比さる部類や出來にけん。凡そ桑門にして我慢甚しき事此國ばかり甚だしきはなし其をいかにと云ふに叡嶽三井南都を始め國々なる大社の別當大寺の住持身に甲冑をよろひ手に弓矢を執り軍を起し戰を好む事武士よりも甚し天笠支那にさる例をきかず柔和忍辱の和合衆斯る振舞ある事はひとへに業大身を焦して慢地首を擡

るにあらずや。いでや昔は佛法僧を潔く崇敬し給ふにつけて智德兼備定慧堅固にして菩薩と仰がるる大善知識ども少からず其他四海に及び其法一門に盛なる物から法久しして費多き習はおのづから止む事を得ずる勢にして才學に誇り論義につのり遂に大我慢を起して魔界に生をや受けたりけむ。先年人の云へる事あり天狗といふ是は威德かしこき神なり其部類に天狗といふは禽獸より化したるが多くしてさがなきわざなどするものなりと語りしを其時は大よそに聞きおきしが今よく思へばさる事もあらんか。平田篤胤の許にありし童の天狗に誘はれて種々の事ありしを伴信友が書きしるしゝ一卷を見しにいと珍らかに靈しき事なん多かりし。其いざなひしを杉山僧正といへりしとぞこれが言へりし樣凡そ人の目にこそ見えね人の妨げをなすものいと多かり我はこれを防護するものなりといひしとなん僧正としもいへれば沙門にして通力自在の人なるべしかの天神と言ふはかゝる類を云ふにや異なるや幽冥の事なれば測り知るべき限りにあらず。平田は才學高くして殊に佛を罵り法を譏りし博士なるが此僧正に率られし童をしもうけられしを思へ

ば此僧正はすぐれて貴く過れてかしこき高德なりけん。又平田もさばかりの博士なれば佛門中にも智德高き人は陪せしならんかそはとまれ。かの大我慢を起こすと云も智力强きが上の事にして沙門の心行を失ふといへども本濟度の心は全く失せずして天狗となりても人を助け世を守るもあるなるべし世の物識人といはれて我慢に誇るもの尤も少からぬを天狗に化りしといふ事も聞えざるは文字名利の上のみにて心身煉磨の行なき故かまたは今一層强盛の大我慢王と化りて多聞の喙もたゝき博識の翼を鳴らしてひゝらぎ居るにか幽冥の中なんあやしくはかりがたきものにはありける。

此の高倉下の御社は本宮にもありてここかしこといづれが夫れならん御劍下りし家はいづこぞなど云ひあつかふめり。是のみならず古書に見えたる地名ふる事の本新互に傳ありていと紛しき事少からず是をとかく考え定る人もあれど皆推量事のみにて是をよしといはゞ彼諸はず左を得たりといへば右に證ありといふ他を

牽强附會と譏りて自らの牽强附會をしらず甲乙丙丁互に考へ爭ひして畢竟戲論の域を出でず名の爲めか利の爲めか喞々疑しきを欠くにはしかず。

註　僧化して天狗となりしと云う例　高野山に在り。高野山通念集參照。

飛鳥社に詣づ。あすかといふ名はしば〳〵川のあする所を言ふ我紀の國にて川の水淺く蘆浦など生ひたる處をあせといふも同じ此新宮の湊も時々洲となるといへば飛鳥の名はあるなるべし此社にて。

淵は瀬とかはりゆく世も飛鳥川あせぬは神の御稜威なりけり

註　飛鳥社　上熊野地にあり飛鳥の字嘉元二年の文書に阿須賀と書す按ずるに飛鳥は舊地名より起れる社號ならん此地飛鳥川の南の崖なれば飛鳥川の名をとりて社號となせり

祀神は社家の傳へに事解男命早玉男命を祀るといひ土人は荒き神にて祀りなど疎にすれば祟りありといふ按ずるに愛德山縁起に軍武男阿須賀大明神鰐を斬りて熊野大神を助け奉れる事見えたれば其功を賞して攝社に祀れるならむさて大社高市郡甘南備飛鳥社は事代主神を祀れるを思ふに上に引ける縁起に越の舟泊の書作れば夜崩れたるを熊野神作らんと思召して鰐に呑れし時阿須賀神其鰐を斬りし事見えたれば崩れやすき淺所（あすか）の地を守り給ふは事代主神にて大和飛鳥にも祀りこゝにも祀れるなるべし（紀伊續風土記）

此所の知事殿對面賜らん參るべし。とありければ參るいとも懇ろに語らひ賜ひて種々物など賜ふ。

註　知事　廢藩置縣の析柄で知事と云うも其實舊藩主であつて此時の新宮藩主わ水野忠幹侯其父君土佐守わ千廣の政敵であつた。

水野大炊頭忠幹侯　第十一世の新宮藩主忠幹侯は其性行大いに父侯と同じからず、鶴峰老公の機略に富める政治家たりしに似ず、忠幹侯は恭儉謹直にましまし文武の材あり殊

に忠勇なる武人の典型たり、かの征長の役に三軍殆ど闘志なきの中にありて、毎に馬を硝煙彈雨の中に立てさせられ叱咤、督勵邁往奮戰敵鋒折れかゝるもの數々長軍をして幕軍又將ありと敬嘆せしめられ明治維新の際には他の列侯と同じく表を上りて封土を奉還し明治二年六月新宮藩知事を仰付けられ同四年七月十四日廢藩と同時に本官を免ぜられ、同年九月東京に移られ華族に列し男爵を授けられ、錦鷄間祗侯に任ぜられ三十五年四月三十日相州鎌倉に逝去あらせらる（下略）（小野芳彦遺著熊野小史。）

廿一日。此程の荒れすさびにて御祭一日一日と延びたりしを今日空よし御祭行はるといふいとうれし是御祭は新宮の濱より御船に神寶をうつし奉りて熊野川なる御舟嶋といふ島をめぐりきて兒が嶽といふ山邊の御旅所に幸ますなり。御船は龍頭にて朱塗りなり此御舟には童人形ひとり侍ふ引舟二三艘また御供仕ふる船十艘ばかり同じ湯かたびら着たる舟子左右に列りてねりかひ遣ふこれを熊野川の諸手舟といふ也。さて御船かの嶋をめぐりてこなたの渚に着き賜ふその時遲しかの

時はやしかの諸手どもこぎ出して嶋を二たび廻りて我が住む浦にこぎくだる魁したる舟は幸ありとて我後れじとねりかひ遣ふさま百足の走るやうなりいと珍らかにいさぎよき舟競になんありける。

御幸すと諸手榜回御舟嶋波も八千世の聲やたつらむ

此出ましに一つ物とて若き男の人形に垂れ衣著けたる笠をきせ腰に尾花をさしたるを馬にのせて御先に進む尾花は先拂ふ心にやすべてめでたき御祭りなり。

註　御船嶋　新宮の西の川の中にあり毎年九月十六日新宮祭禮の時神輿を御舟に乘せ奉りて此御舟島をめぐり給ふ事あり（紀路の歌枕）

御舟嶋といふ所にて

増基法師

底の瀬に誰棹さして御舟嶋神のとまりにことよせさせけん（庵主紀行）

少將内侍

三熊野の浦輪に見ゆる御舟嶋神の御幸に漕ぎめぐるなり（藻鹽草）

註　諸手船　諸手船は神代記に是時事代主命の神遊び行きて出雲國三穗の崎に在り釣魚を以て樂しみとなす故に熊野諸手船を以て使者稻背脛を載せ之を遣すと見えたる舟にて靈異記に當郡の事を記して熊野村の人熊野河上の山に至り樹を伐り船を作るとあれば上古此邊にて造れる船を熊野諸手船とも云ひ略して熊野船とも云ひしならむ（中略）其形は今出雲國三穗神社の社壇の下に小さき船を納む是を上世の諸手船の雛形といひ傳ふ。（下略）（紀伊續風土記）

太上天皇御製

熊野川せぎりに渡す杉船のへなみに釉のぬれにけるかな（續古今集）

註　一つ物正紋の一つ物　馬に編笠着たる人形を乘す舊は若き人を乘せたりといふ衆徒永田氏より出す寛文記に一つ物は金襴の狩衣を着て萱の穗十二本に牛王十二枚挾み腰にさして鍬馬に乘り御輿の先に立つ其萱の穗は大島より獻ずるを衆徒等七日の間神前に籠り祈禱して出すといふ（同上）一つ物わ紀伊でわ此外にわ栗栖の一つ物と云う例がある。

註　右の祭禮を御船祭と云う。

廿二日那智に行く。三輪が崎佐野のわたりと詠めしも此道なり此三輪が崎に行く磯山道の程に御手洗井と云ふ所あり、錦戸畔を誅ひ給ひてここの磯にて御手を洗はせ給ひし處なりといひ傳へて今も御手洗とよぶといへり。磯の隈回にこゞ敷たてる巖どもに浪のうち入るさま牛頭沒し馬頭回るいと面白しと打見つゝ。

かへる波寄せくる浪にせめられて共にくだくる磯の白折

波の折れ來るを此あたりのもののしらをれといへるがをかしかりければ此詞を用ひしなり。三輪が崎のあたりはかのあらびに濱邊の山道うち碎かれて通ひがたければ渚にくだりて行く大石小石まろび合ひたる上をとかくして辿りゆく三輪が崎の濱べの家一つらに打碎かれて行方しらずときゝしがけに殘りたるも大方くだけて傾き倒れたりいみじきさまに家もあらなくにとながめらるるも哀れなり。此濱みわたし晴々と限りなし。

はてもなき渚のめぐり白木綿の花もてゆへる千重の磯波

註　三輪が崎　佐野村の寅の方十町ばかりに在り村の丑の方廿四町餘新宮廣津野と風土峠を堺とす村居海上にさし出でたる崎に群居して家數五百軒許り皆漁事を業とし極月より春に至り鯨をとるを專らとす東の方磯岬より宇久井村まで大灣をなし海上數町の間に

久島鈴島等ありて絶景の地なり地形に依るに三輪の三は眞と同じく美稱の詞輪は灣の義にて三輪崎は大灣の岬の義なるべし三輪が崎の名萬葉に始めて見えて風詠あり（伊紀續風土記　現在新宮市三輪崎）

註　佐野村　字久井村北二十二町半に在り三輪崎村と相接して海に面し新宮往還にあり佐野舊は狭野と書けり狭野の名神武紀及び萬葉集等に見ゆ（同上）

註　三輪が崎　是は秋津浦の東北に續きたる濱邊なり三輪崎の里あり佐野の里この見渡しなり此名所諸書に紀伊國に出さず然れども私の了簡を以て爰に之を載す仔細左に記す三輪が崎夕潮させば村衢（むらちまた）佐野のわたりに聲うつるなり（權大納言實家夫木抄）三輪が崎佐野のわたりは大和の名所に入る又松葉集に仙覺抄の説として三輪が崎佐野の舟橋とよある歌とも近江に入れたり右兩説を以て此歌を考るに大和は海なき所なれば夕潮させばとあるに相違なり又近江の歌にしてもたとへ湖水の邊にても夕潮させばとはあるまじきや東路の佐野の舟はしなど勿論の事なりされば御歌にとりては紀伊國三輪崎尤も相叶ひ

たるにやとよつて愚老の了簡を猶憚りある事なれども爰に出し侍る。

三輪の崎荒磯も見えず波立ちぬいづこよりゆかんよき道はなし（萬葉集）

此歌荒磯とあれば外の三輪崎にはいかゞ（紀路の歌枕）

苦しくも降りくる雨か三輪が崎狭野のわたりに家もあらなくに（萬葉集）

秋風の寒きあさげを佐濃の岡越えなん君に衣かりましを（萬葉集）

註　御手洗岩　村（三輪崎村）の丑の方十七町往還の下海邊にあり平かなる岩の上に盥の如く窪みたる所三所あるを三所洗岩といふ（紀伊續風土記）

このあたりにては鯨をとる所なりとて鯨船多く見えたり。此船は前後など樣々に彩色（いろどり）て花やかなるものなり鯨をとる事彼の西洋人は火筒を放ちてとると言ふ此

あたりは「もり」と云ふものを打ち入れてとるなり一番二番と舟の走る事箭よりも疾く打入れてよわりゆくほど殊にたけき男海に入り底をくゞりて腹に穴をゐりそれに綱を透して引きあぐる是を手型切るといふ此鯨とる働き双（ならび）なき見ものなりとかねても聞きおきたるをいまだ時早くして鯨よらずと云へばせん便（すが）なしたゞきしままにて詠る歌。

打つもりを簑毛とたてて荒海の波よりはやくよする八十舟

註　太地浦捕鯨史（太地漁業學校編）參照。

三輪が崎沖つ雪げの夕風に鯨とる船旗手ひらめく（山田常典歳葉集）

いさなどる海邊を見ればさにぬりの神代の御船今も浮べり（長澤伴雄絡石の落葉）

ひし投げて鯨つく見ゆ逸鳥の翅のうへにたれか立つらむ（加納諸平柿園詠草）

宇久井といふ浦邊の家にて豐飯せんとするに芋の飯ありと言ふ。この事はかねて聞きおける事なればいでと云ふやがて盛り立つるをみるに腕の中さながら芋のみにして米にまみれたり是を物しつゝ思ふ事なんある。おのれ此春いたくわづらひてほと〳〵免れがたくありしをかの「ほうとるん」くすしの助けにてつぎ〳〵よろしくなり今かくおどろしき山路の旅に出で立つ事も全く養ひよろしきによれり。そは「ほうとるん」の教にて米飯を物せずたゞ「ハム」といふ物と牛の肉のみを養とす初のほどはいかにあらんと疑ひしかどつとめてがくする程にその宜しきを覺りて今はたゞ此の二種をのみ用ふ。かくさとるにつけて考るに萬の食養ありと雖も牛肉にまさるものなし米はかす多く力少く多く食へば物滯り氣塞りて病をかもす。しかるに此國は瑞穗もて最第一の食養とす、是を捨てては命根養ひが

たく一日も闕くべからずと思ふ習なればふとさとりがたき事ながら身を養うは必ず米にかぎるものにあらざる事を知るべきなり。今このあたりの食養を見るにたゞ芋にて養うなりわづかに米を交へたりとも何ばかりの力あるにあらねど米と云へば一粒にても有りがたき養と思うばかりの事ぞかし、昔われ世に有りし時民の司に在りしかば常に此熊野の米に乏しきを歎きてさま〴〵心を盡ししを今食養米に限らざる事を知りては先の苦心と工夫愚かなり。因りて思へば萬事一隅に局るべからず萬國各勝れし事ありひろく見ひろく聞て文明の道開くべしさきに西洋人と云ふ題にて歌あまた讀みし中に。

外つ國のよきわざとりて我國のわざと遺ふぞ御國ぶりなる

となんよみたりしが昔を云へば儒佛莊嚴の國なり今また西洋の道ひらけて益々事物盛なるべし。儒をのみ執し佛にのみ着する皆あやまりなりとは人も言へりか

ゝれば西洋のみ執するも亦あやまり乃至御國學のみに固滯して他を省みざるも事狹かるべし。今迄長者よ豪富よと人もたゞへみづからも誇らひ居りし家どもの今日かの諸國に對ひては數にもあらぬすさびにて面伏なる事多かり。興がるはなしの有るぞかし都人の山里に行きけるに宿のあるじのいふやうかしこの谷の上なる家は權太郎太夫と呼ばれて双なき福人に候いつとても錢多くをもちて候といひしとなんかゝれば一隅に蝸縮すべからず。

神代卷に云ふ。素戔嗚尊曰韓卿之嶋是有金銀、若使吾兒所御之國、不有浮寶者未是佳也、乃拔鬚髯散之即成杉、又拔散胸毛是成檜、尻毛是成櫲樟云々とありて後に神功皇后三韓を治め給ひ金銀は更なり儒佛其他種々の道も來りて鎭長に行はるるをおもへば其根本素戔嗚尊の御心に起れりこれによりて考ればいづれの國にまれ其よきをとりてこれの用となす事は神の御心なる事を知るべきなり。豐榮昇る朝日の御影萬邦を照して隈なく打靡く春の初風四方にわたりて皆春

なるが如く萬方貫通の理こそ我大御國の光ならめ堯舜を賊と呵し釋迦を愚物と罵るが如き意氣の高きはさる事ながら我一洲すら諸ふもの百が一に及ばずいはんや外國に於ておやすべて唇舌の上にて爭ふべからず西洋の船銃そのわざすぐれたれば我國にも是を學び是を用ひ給ふ如くわざだにまされば何れの國か仰がざるべき百言千言千萬言舌頭地に落つるとも勞して功なきことならん吾は老ひて古稀に及べり今更何の力もなしたゞ幼き孫どもの寢物語の種にもと筆の因に言ふになん。

得る時は何の道かは道ならぬ心からこそふみ迷ふなれ

因に言ふ命根の延促は食養の能する限りにあらずと雖も根力の强弱は必ず定めて食養にありと云ふべし其あかしは西洋人と我國人とをくらぶるにいかにしてもかれは根力つよく是は根力よはしそは種々の事を考え出す力にても知るべし御國とても全くなしといふにはあらねどいと少し根力は心の活きなれど根弱き時は功

を遂ぐる事能はずたとへば書を讀むに眼根弱き時はいかほど勉むる心ありとも眼勞れ心倦て力を盡す事の叶わざるがごとし。つきて云ふ我國人ばかり食に制度なきはあらじ舌上に美きものは飽き足る事を知らず殊に酒宴など强ひられて限りなくはて〳〵は席にたえず嘔吐などしよろめき〳〵家にかへり來ても物を覺えずあくる日も猶醒めずして頭いたく氣閉てうめき居る類いと多かり。よく思ひ見よかく心を疲らし身を苦しむる事を知りつゝ貪り飲むの愚なるは言ふも更なり人を惱す事を知り乍らひたぶる醉してしたり顏なるあるじ方の心も共に愚なる限りなるを然習ひ來て其非を顧みざるなんいたましき限りなりける。かやうのしれ事をはじめ常の食養にも制度を立ててよく養はんにはおのづから身體堅固根力勇猛にして事をなし功を遂ん。この一件の論には彼の國の事をよく明らめたる人はいふ迄もなきことをと思ふべけれど山里にては此理しる人猶稀にして頑なる習のみなり。山里はさてもあるべし此浪華は天が下の大湊にして殊にまのあたり見聞く事なるを猶しる人は百が一なめれば老居士一片の婆心爲人の說法ながらよく思へば

重言不當叱ものか。

註　明治三四年牛肉を食うを穢れとしたる時代の記事なる事を察せられたい。洋醫ぼうといんの事わ未考なるも維新當時長崎に來り後大阪に來りしと見ゆる本邦人でぼ氏の門に入って研鑽した人が少くない京都の人越智仙心もぼ門の出である（熊野雜誌）

此日那智につくあくれば大宮に詣づ。十二宮立ち並びてめでたく見ゆる物から猶假宮にいまして還宮の事行はれず假宮もいたく古びたり。いかで速に本殿に還し奉らばやと思はるるを況んや奉仕の身としてはいかばかり心苦くあるべきをいかなれば年久しくは過ぎ來にけん。大悲者はかたの如くおはすものから外にうつすといへばにやおのづからさう〳〵しく物あはれになん。いでや蟻の熊野參りと云ふ諺は此山の盛りの比國々の人間もなく參りくるを蟻の群行にたとへたる事なり。しかるに近き世となりてはかの道者順禮の比類いと少くなりぬそは物の價貴

く旅路の費たやすからぬ故なるべしさこそ言へ猶縮みはてぬは大悲者の惠みを仰けばなり。さるに所かはらば此山いかにさぶしからむもとより神は尊き極みなり人の參り參らぬによる事ならず佛菩薩の方にとりても利襄の八風動かすべきにあらず殊に三十二應無料不現身の靈妙豈一寺一像に滯らんたゞ人目かれ行かんには此山の凄じきのみならず新宮本宮かけて道すがらの山里籠のけぶりうすれ行かむとおもはるるばかりなり。然はあれどあなかしこ大御政は高きより低きを照し給ひ進退興廢時の宜しきに隨ひ八十隈落ちず見し明め給へば所謂杲日麗天清風匝地凡下の身としてとかく申すべきにあらず。神佛の御上はもとより凡慮の及ぶ所にあらずすべて不可思議不可說なりたゞ天清く地平かに物潤ひ事安かれと祈らんのみ。

註　那智山　那智色川高田小口の四箇村に跨る峻嶺にして海拔八三六米、下馬なる振加瀧橋より磴道約十町ばかり登れば官幣中社那智神社久及び那智觀音あり（小野芳彦熊野

小史）那智神社と那智觀音とわ隣合せて座し熊野三山の一をなしてゐるわけである。

註　那智十二所權現　當社は本宮新宮と鼎立して　三山と稱し祀神十二所權現と稱す然れども十二所權現を祀る事は中世以後の事にして其初は三山共に古く鎭り座せる三座の神を祀るそを佛模樣になし來り是を熊野三所權現と稱す。（紀伊續風土記）

註　青岸渡寺　仁德天皇の御宇裸形上人瀧壺より八寸の如意輪觀世音の靈像を感得其後推古天皇の御宇生佛上人一丈の觀音像を彫刻し瀧壺出現の金像を胸裡に納め勅願により本堂を創建す實に紀元千二百五十五年とす明治三十七年二月如意輪堂を特別保護建造物に指定せらる（東牟婁郡誌）

木の下を住家とすればおのづから花見る人になりぬべきかな　（花山法皇榮花物語）

思ひきや草の庵の露けさをついの栖かとたのむべしとは　（前大僧正行尊續千載集）

木のもとに住ける跡をみつるかな那智の高根の花をたづねて　（西行法師風雅集）

又たぐひ那智の御山に澄む月の清き光りに松風ぞ吹く　（後鳥羽院夫木抄）

雲かゝる那智の山かげいかならんみぞれはげしきながきよのやみ　（藤原定家拾遺愚草）

冬ごもり那智の嵐の寒ければ苫の衣のうすくやあるらん　（鎌倉右大臣金塊集）

かくて瀧のもとに至る是一の瀧なり。堂ありてこれより見るいでや世に富士と近江の海と此瀧をもて三大對と言ふもうべなり横は八間竪八百尺となん眞白く落ちくる半ばばかりに岩あるにや雪を吹き出すが如く見ゆ。まのあたりならずばうつすともうつす限りにあらずなん。

瀧つせをふりさけ見れば青雲に神鼎きてゆきぞちりくる

いつとなく雪ぞ流るる不二をのみ時知ぬとは誰かいひけん

岩裂けてまろびが落つときくばかり雲に驚く瀧の音かな

註　那智瀑布　熊野は深山幽谷天下に比なきを以て郡中瀑布の多き事數へ盡しがたく異態奇狀各其趣ありて心目を悅ばしむるに足れり當山の瀑布はこれと異にして實に群を出で萃るを拔くといふべし高さ百有餘丈にして廣さ十有餘丈懸瀉の勢言語詞筆の及ぶ所にあらず古人瀑布を論ずるもの銀河倒に懸るに喩へ或は積雪千仞の峰より崩るるに比す大低其髣髴を得と雖も未だ其實を盡すに足らず瀧壺の大さ三町餘迅雷潭底に起るが如く人語辨ずべからず流沫四方に迸散して霧の如く雪の如く其側一町許りを隔てて猶衣袂忽濕ひ寒氣俄に身を襲ふを覺ゆ海内の奇絶を數ふる者富士淡海を併せ擧げて天下の冠絶とす

此瀑布を加へて實に皇國の三絶と云ふべし。

朝廷飛瀧神と崇め宮社に列して御崇奉あらせらるるも由ありといふべし。傳へ云ふ花山法皇九穴具を瀧壺に沈め給ふ白河法皇御幸の時泗工に命じて潭底を探らしめ給うに九穴の具猶ありて經三尺許りなりしぞと詳に源平盛衰記に見えたり今より五十年前山中大洪水出で側の山巒壞れ崩れて瀧壺を埋め大巖大石いやが上に墮ち重りて今は古の瀧壺の處より高き事二十間餘其壯觀十分の二を損ぜり陵谷の變古人の嘆ずる所なれば千百載の後亦も古に復する事もありなんかと人々欲する心あり（紀伊續風土記）

人のすゝめて熊野へよみて奉りける

那智の山遙におつる瀧津せにすゝぐ心の塵も殘らじ　式乾門院御匣（續古今集）

那智山に千日こもりて出侍る時よみ侍る　前大僧正　道瑜

三とせ經し那智の御山のかひあらば立歸りみん瀧の白浪（新後撰集）

三熊野の南の山の瀧津せに三とせぞぬれし苫の衣手（玉葉集）　法印良守

世をのがれて後那智にまうで侍りけるそのかみ千日の山こもりし侍りける事を思ひて瀧のもとに書つけ侍りける

三とせへし瀧のしら糸いかなればおもふすぢなく袖ぬらすらん（新千載集）　法眼慶融

石ばしる瀧にまがひて那智山の高根をみれば花の白雲（夫木抄）　花山院

瀧上櫻

雲かゝる那智の高根に風ふけば花ぬきくだす瀧の白糸（同上）　源仲正

光明峯寺入道攝政

那智の山雲井に見ゆる岩根より千ひろにかゝる瀧の白糸（同上）

法印良寶

おもひ出る袖さへいつもかはらぬは那智の御山の奥の瀧つせ（同上）

從二位家隆

雲かゝる那智の瀧津瀬風吹けばふるき軒端に玉ぞくだくる（同上）

鎌倉右大臣

三熊野の那智の御山にひくしめの打はへてのみ落る瀧かな（同上）

權僧正公朝

瀧の音に松のあらしも埋もれぬ那智の御山の秋の夕暮（同上）

慈鎭

かさねても流れもたえぬ三熊野の濱夕暮の那智の瀧つせ（拾玉集）

西行法師

雲消ゆる那智の高根に月たけて光をぬける瀧の白糸（山家集）

三重の瀧を拜みけるに殊に尊く覺えて三果のつみもすゝがるる心地しければ。

身につもる罰のつみもあらはれて心すみぬる三重ねの瀧（同上）

山ふかみさぞ高からし都まで音にきこゆる那智の瀧つせ（同上）

頓阿法師

山ふかみ雨より落つる瀧つせのあたりの雨は晴るる日もなし（草庵集）

權中納言　藤原爲尹

落たぎつ岩うつ瀧の那智ごもりさても心は猶やすむらん（千首）

牡丹花

さみだれの日數へぬれば浦波もひとつにひゞく那智の瀧つせ（同上）

正徹

いづくより流れ來にけん日の本のはじめは那智の瀧の水上（草根集）

雲井より落ちくる瀧の行方とやしほまで高き那智の浦波（同上）

釋正廣

山姫の思ひを高く三熊野や水の煙に瀧の岩なみ（松下集）

雪ちらす那智の御山の瀧波を霰になして降る時雨哉（同上）

加納諸平

壁たてる巖透りて天地にとどろきわたる瀧の音かな（柿園詠草）

瀧姫の御衣の白妙幅ひろみさくいかづちやおもひかけけむ（同上）

高機を巖に立てて天つ日のかげさへおれる唐錦かな（同上）

あしたづの翅のうへに玉しきて神やますらむ瀧の水上（同上）

富士も見き近江の海もわたりきて今はとおもひし瀧にやはあらぬ　（同上）

世の塵にまよふなげきは聞とめぬ神の御聲や瀧にそふらん　（同上）

益荒夫がすべしもとどりときはなつ瀧のひゞきに雨みだるなり　（同上）

神あれし五十年の秋の一つぶていつまで瀧をさへむとはする　（同上）

此歌は天明それの年山すゝぎといふあらひありて瀧の上より落ちたる大巖どもをあかぬことにおもひてよめるなり。

夏目甕麿

天の川ながれてくだる世ならずばなにくらべん那智の大瀧　（熊野雜誌）

落ちたぎつ瀧の水上見てゆかん雲なをくらし那智の高山　（同上）

入田知紀

中々に雲より上に雨ならで末は烟のなちの瀧津瀬　（同上）

本居内遠

熊野なる瀧のさぎりは松杉の雫となりてかつしぐれつゝ　（同上）

本居清島

是より二三の瀧見んとてゆく是を瀧禪定といふ。山深く徑險はしければ大方ゆく人もまれなりといへど此までこしをいかでとて行くけに險しき坂にて木立物すさまじくあるは齒朶笹など丈に餘りて生茂り或は岩角凝敷して容易くのぼるべくもあらず。おのれはもとより坂をのぼる事はいと苦しく足たゆく息せまりてわづ

かなる坂すら困ずるを若く健かなる男も行泥む山路なれば苦しとも苦しくて前なるに手をひかせ後へなるに腰をおさせてすぢりもじりてのぼるさまいかばかりおかしかりけん。やうやうこの瀧にいたれば溪川あり大石小石磊々落々たる間を澄みわたりて水の流るる様いと清し石を傳ひ水をわたりて彼方の岸にいたれば二の瀧なり長さ十七間と云ふ。

みなそそぐ溪の床磐ふみとめて瀧より奥の瀧を見るかな

花山法皇の御庵室の跡といふあり。今は生ひしげりたる林なり御名殘りとて御茶壺御茶碗を石の櫃に入れたるあり此法皇あやなき御迷ひより佛門に入り給ひてかゝる恐ろしき山奥に御すきやうありしは畏しともあはれなる御事ぞかし。三の瀧に行く程に猿岩屏風岩など云ふあり猿岩は溪をへだててかなたに聳り立てる岩山なり猿田彦を祀りしにや此岩を猿田彦の神と申すとなん屏風は折曲りてたちたる様名の如し。又七色の木といふあり道のかたへに三圍り四かゝへもあるべき大木なるが本は櫟にて楓樫小柴馬酔木つゝじ姥目など大きなる枝ありいつの世にかゝるものの生ひ出でけんあやしくもめづらしき物になんありける。

朱綠枝さし交す一本はいかなる神のかざしなるらん

三の瀧は二の瀧よりは少し短くて十四間といふ。然はあれど其勢甚だ烈しく山深く入來ればすべての木立岩がねも物冷しくてすゞろ毛もいよだつここちす。

風ならて間なく草木ぞ搖ぐなるとどろき落つる瀧のしぶきに

ゆら〳〵と打驚くさまも外になきけしきなり。ここより奥は人の行く事なしといへばもとこし路を歸りくるに二の瀧のもとに人待ち居て割籠さざえ取り出し瀧

の流れを汲みて茶を烹る。寂々寥々たる谿陰にして鳥の聲も聞えずたゞ瀧の響きのみ心にすみわたる仙人の住處ににや來にけん瀧禪定とはうべも云ひけり世間の煩惱無量の塵勞底を竭して流しつくす一劍倚天寒とや云はまし。くれ方坊にかへりて湯あみ物たうべさて脚さしのべたるまことに體胖に心廣し。つくづく今日の山踏みを思ひ出づるに幾年か心にかけながら其事もなく過ぎ來しをおのづから時來り老ひて後ここに來りしのみかは袈裟ではさまで思はざりし奥の奥まで見廻りて世にめづらかなる山ぶみしたる事は我ながらあやしきまでにて是皆神のみちびき給ふにやと思ふもかしこく辱し。さても登りゆく程のくるしかりつる事よ何にたとへんかたもなかりしを今かく衾かつぎて臥したるここちのびのびとして何のくるしき事かあらん苦しみはたゞ二時ばかりのほどにして此苦によりて生の涯みこの思出のたのしみいくばくならん。かかればなべての事苦を經ずしては樂を得ざる事今日の山ぶみをもて知るべきなり苦しみ深ければ樂しみ大なり。是不一番寒徹骨爭得梅花撲鼻香と誦するほどに眠りけん跡は覺えず。

註　二の瀧　一の瀧の西北十餘町にあり高さ三十間あり山家集に此事を記して「この瀧のもとへ參りつきたり如意輪のたきとなん申すと聞て拜みければ實に少しうちかたぶきたる樣に流れくだりて貴く覺えけり」云々（紀伊續風土記）

註　三の瀧　二の瀧の西北三町ばかりにあり高さ十間ばかりなり（同上）

註　花山法皇參籠所基趾　那智本社の西北二十五町にあり（同上）

あくればかへらんと云ふに雲かき曇りて雨ふる。かの濱邊いたく荒れたれば雨にはいかでといへばとどまる。若き人々は妙法山へとゆく。此山路もいと險しくて踏み分けがたしといへば我はゆかずいとつれづれなるに雨もおやみにけり。いでや又來ん事もかたし今一度瀧見んとてゆく側の堂にいたりて見るに雨さへそひて其烈しき事昨日にまされり今日はここのみなればこころ靜にながめつゝ。

眞熊野の那智の御瀧を天の原仰放け見れば人傳に聞つる事もかくもやと思ひし事も今更に愚なりけり今も又いかにたゝえむ雪のごとみだるゝと云はば大かたの雪とおもはん神のごとどよむといはゞ世の常の神とはからん神と云へど加美にもあらず雪と云へど雪に異りたとふるに物こそなけれよそうるに事こそなけれ我も人も高み長みひたぶるに空を仰ぎてあはれ〳〵あはれとふ外にいふ便もなし。

溪聲卽是廣長舌　山色豈非淸淨身
夜來八萬四千偈　他日奈何付與人

坡公ここに來らばまたかくや云ふべからむ。

人とはばよどみがちなる老舌にいかにこたへんこれの大瀧

註　妙法山　那智山峯の第一なり寺は眞言宗にして弘法大師の開基の由大師堂の木像は自作なりと云へり阿彌陀堂を四方淨土と號す鎭守社には三寶荒神を祀るとなん寛文の寺記によれば當山は弘法大師の開基にして骨を納むる事などは高野山に準ず高野は女人結界の地なれども當山は女子も登山をゆるすとの事なり中世法燈國師再興して當山に居住する事元享釋書に見えたり世俗に亡者の熊野參りと云ふ事を傳へて人死する時は幽魂必ず當山に參詣すといふいと怪しき事など眼前に見し人もありこは何れの頃よりいひ始めし事にや古きものにも見えざれども世の人古く云ひ傳へたり（紀伊續風土記）

あくればここを立ち出づ。濱の宮と云ふはもと補陀落山とて觀世音の堂なりしを那智にうつしてここは社となれり。かくてまた宇久井の浦邊をかへり來るほどに此あたりの畑を見れば石のみにして土はみえずここは世にいふ那智黑といふ石の出る所にして此畑も色黑からねど同じ石なり。あはれいかに上べこそは石なら

め根は土ならんと問ふに底まで石にてはべり此あたりはすべて石のみに候といふ麥綿も作り候芋は殊に味うまく候といふ猶いぶかしくて鶴をおりて一尺餘りほらせ見るにまことに石のみにて土はみえずいとめづらかなる畑地なり。

種しあれば岩にも松はとばかりに青葉しけれるさゞれ畑かな

かくあれど必ずここのみにあらじと思ひつゝ日高に歸りて此事を語るに。日高の浦邊にもさる所ありと言ふ。さればよき土畑あらんには殊更にさゞれの中に種をおろし糞など注ぐべくもあらず土なきゆゑに止む事を得ずしてうゑためるをおのづからよく出で來れるより常の事とは成りけん。かゝれば河邊濱邊のさゞれの中にこころみにうゑみまほし若しよくかくあらばいかばかりか民の助けとなるべきをと思はる。大串小串といふ峠こゆる程に洞ありこなたより望めばいと大きなる楕型の窓のやうに見えたり此洞のかなたの渚に打よする波の高き時は洞を打こす今もしばし見てある程に二たび三たび打こしたり寄せくる方は見えずして洞うち出る白波は群たる白馬の躍るが如し。

わだつみの神や鞭打つ駒が崎たばしり出る洞の白波

めづらかなる見わたしなり黄昏ごろ新宮にかへりつく。

註　濱の宮　那智登山の入口和歌山縣東牟婁郡那智町大字濱の宮。舊祠渚の宮古刹補陀落寺あり（小野芳彦熊野小史）

よもすがら沖のすゞかもはふりして渚の宮にきねつゞみうつ　（源仲正夫木抄）

遙かなる那智の濱路を過ぎてこそ浦と海との果ては見えけり　（皇后宮太夫俊成同上）

註　那智黑石　碁石に世に那智黑とて翫弄するもの多く此海邊より出る所なり又金銀の質を試るとて擂つくるによく其品種をわかつ故に試石（漢名試金石）ともいふ、濱にあ

る時は藍色なれども翫賞するに隨ひて黒漆の如く肌密にして愛すべし（紀伊續風土記）

近頃わ島翠石と名づけ硯又わ碁石につくりてうる。

註　大串小串　大狗子坂小狗子坂　宇久井村の西新宮の街道にあり東を小狗子坂西を大狗子坂といふ（同上）

註　宇久井村　那智莊狗子川村の東三十一町餘新宮の往還にあり村居海に面す村の巽の方長さ十町餘幅二丁許り海中に突き出て橋を架するが如く其崎山巒南北に連りて長さ一里餘形丁字をなし北の端を赤島といひ南の端を駒崎といふ目覺山中間にあり村の北濱續きに佐野村佐野の寅の方濱續きに三輪崎村あり三輪崎と宇久井の出崎と南北相對し其内海灣弓の形をなし鈴島久島赤島目覺山など島々南北に相並び大低絃の形をなせり海濱弓の形に墮ひて翠松萬珠麗施として相連るもの畫圖を開くが如し高に憑りて海灣を望めば海岳相映じ遠近勢を張り清麗爽快目力悉く應ずるに暇なく心賞悉く給する事あたはず實に海南の絶勝といふべし都て海濱の風色美なるもの多しといへども唯此地を魁首となす

べし（紀伊續風土記）

廿六日那智よりかへりこば今一度對面賜らんとありしかば今日又知事殿に參る例のねもごろにかたらひ給ふ。

此新宮の御社にいと大なる椰あり。壹本より立ち並びて七もと八もと同じさまに生ひ茂りたり熊野に此木の事を云はば是にやと思はるれど椰は本宮にもあればかならずこれにかぎれるにはあらざるべしされど世に珍らかなる木立なり此もとにて神祇の歌よむ。

眞熊野やうらの朝夕なぎの葉のなぎてのどけき神風ぞ吹く

註　椰の木　竹柏　ナギ　一位科　常綠喬木　境内に雌雄數株ありその最大なるものは

雄木にして地上五尺の處にて幹の周一丈四尺七寸高さ五丈八尺に達し此種の老樹として全國第一位と稱せられ平の重盛の手植といひ傳ふおもふに二條天皇の元治元年己卯（紀元千八百十九年）當社御造營の時重盛奉行に任ぜられしかばその光榮を記念すべく献木せる所なるべし（新宮町誌）

むすぶの宮　　檢校宮靜仁親王

なぎの葉にみがける露のはや玉をむすぶの宮や光りそふらん（夫木抄）

なぎの葉をかざしてかへる人もがなよよの御幸のあとがたりせん（柿園詠草）

加納諸平

あくれば新宮を立つ。まだほのぼのの比舟にのる大方は雲とり山をこえて本宮に物するをわれは又熊野川をさかのぼりてゆくなり。見わたせば海原晴々として豐榮昇る朝日の御影沖はるかに匂ひ出でたるいとめでたし。

見渡たせば海原てらす紅のかゞみにかゝる浪のしらゆふ

畫にもかゝまほしきけしきなり川をのぼるほど例の瀧岩など見つゝ。

布引の瀧の白糸落ちくればうべ指まきの岩もありけり

かくしつゝ幾世經にけん達磨岩壁たつ峰に面向ひつゝ

歌のやうにもあらねど舟の中のすさびなり。又玉置山を望みて。

八重たてる其いたゞきの玉置山こや大神の御倉なるらん

村毎に人出てきて曳きのぼれど隈は多し水は早し本宮につきたるは戌の時半ばも過ぎたるべし。

註　熊野川　熊野川巖の中をゆく船のへだゝるものはうきよなりけり（加納諸平柿園詠草）熊野川八重をりたゝむ岩かげを水掉にわけて舟はくださむ（同上）

註　布引瀧　川の西の方山にあり岩面を流るる事白布を曝すに似たり熊野川第一の高き瀧にて最一の美觀也（紀伊國名所圖繪稿本）

註　達磨石　西の方にあり（同上）

註　玉置山　大和に屬す。

あくれば湯の峰にゆく。又七日の間湯浴すここにあるほど鳥居隈四郎草文を持ち來れりかねてききしものにていかで見んといひおきしかばもち來れるなり。これは此奥の山賤が戀路のわざにて思ふものに草を結びて遣すなり錦木に似て錦木にもあらずたとへば思はすもぢ松の葉に小石をそへておもへばこひし寢ずに待つなどやうの事にて種々あり一文字もしらぬ山賤がおのづからなる風流事にておかしともおかしくて。

樫の實を命と頼む山賤も猶ほ戀ひ草にふみまよひつゝ

思う事繩に結びしいにしへもかくやありけん賤が草文

なに波津はならはぬ賤も二つもじ牛の角文字結ぶ戀草

一廻りも既に終りぬ今は本宮にかへらんとて。

吾が心あなすがすがし出る湯にはやく病はすゝぎすてけむ　一

註　湯峰にやどりけるあした雨ふりていとくらし

加納諸平

たきつせのあたりの面やいかならん出湯のけぶりはるる間もなし（柿園詠草）

長澤伴雄

岩根よりわきて出る湯のしら玉にわが玉の緒もまかせてぞすむ（絡石の落葉）

時じくに湯氣かをるなり春秋のかすみも霧もうへにやは立つ（同上）

五日本宮にかへる。果無しと云ふは役行者の本宮より大峰まで路をひらきて通ひし山なり峰を一なびき二なびきと呼び七十五なびきと云へり。

空遠くなびきなびきて果なしのなびきの果ても峰の白雲

今宵玉置がり遊ぶ。正盛翁がありし姿を畫がける像をかけて其前にてうたけす此翁はいかなる契なりけん大かたならずむつびかはして公私さうなき友なりければ何くれとなく思ひ出でつゝ此像に盃をすゝめて。

やよをぢよをぢよ千廣ぞ有りし世を思ひや出づるあはれ其世を

またさきに翁を偲べる己れが文をも並べかけたり筆の因みに此に物す其文。

林はまがれるもしみ立てて陰深く川は濁れるも落ち合ひて流廣し。大けき功を成すものは必ずさゝやけき瑕なき事あたはずかれ心大けきは濁りをいとはずして其廣きをよろこび心挾きに曲るをにくみて其深きを省く是自らの勢なり。ここに玉釧玉置翁はや宮柱太しき立てし其功をたゝへいはゞ彌廣く彌深く今猶其陰により其流をくむ人いとさはなり然はあれど其ほど執り行へる上につきては曲れりと論ひ濁れりと見る人の物いひ免がれがたき事ども少からずやあらむ。但此翁よ形儀も言辭も廉玉の荒びて見ゆれど底津磐根の底心は眞直に動かぬ日本魂清々しき性になんありけるそは交り深からぬ人はしらでやありけん今翁の有し狀を知らんとならば。

荒熊の出で入る山の奥みれば神世わすれぬ花ぞかをれる

かく言ふは共に進み共に退きし翁が友藤原千廣今は自得居士といふ世捨人也。

むかし親しき人々つどひきて心おかず醉ひて夜は更け行く唐錦とのみうたはれて——。

註　果無越嶺　三里郷と和州十津川との間にあり　果無街道　小名八木尾谷より南の方大居村領三軒茶屋より當所に通じ是より北和州堺果無峠を越えて十津川郷堺高野辻まで三十三町半本宮より高野山に至る街道なり（紀伊續風土記）

註　玉置正盛　玉置縫殿　本宮の神官なり家傳に儘速日の命の後裔とあり故に尾張連と稱す（中略）縫殿豪膽にして才氣人を凌ぎ機略縱横爲す所往々人の意表に出づ、文政の末より天保弘化に渡りて二十餘年間、玉置縫殿の名は紀州一藩は固より京都の縉紳公卿をはじめ各藩の間に喧傳せられ三都の茶屋は更なり道々の駕舁き雲助の輩に至るまで其名を知らぬものなかりき。

享保二十一年三月吉宗將軍より熊野三山修理料二千兩を寄進せられたるが此料金は紀州

藩にて保管しこれを領内の人民に貸付け其利子を以て三山の修理費に供せるがかゝる少額の金子にては修理行き屆くべくもあらず文政年間に至りては三山の神殿に雨さへ漏る程の大破に至れり。玆に於て三山の社家は如何にせば完全に修理の資を得可きやを鳩首凝議しけれども別に妙案も出でざりしが縫殿は當時流行の富籤を興行し以て其資を得んと發議し衆議の上之を官に請願し其許可を得て京阪地方に興行し許多の益金を得たり然れども縫殿は之に滿足せず更に永遠の修理方法を確立せしめんとし玆に三山貸付業を開始せんことを企て之を幕府に上願して其允裁を受けたり玆に於て縫殿は貸附頭取となり事業經營の任に當りたるが固より非凡の方幹あり加うるに將軍の寄進金を元資としたることと云ひ幕府保護の營業といひ殊には當時の思想界を支配せる熊野三山の事業と云ひ企劃施設着々其圖にあたり業務大に更弘して終に當時に於ける唯一の金融機關たるに至りしかば縫殿の權勢隆々として沖天の勢あり天下の大人物として當時に喧傳せらるるに至れり。

縫殿が三山貸付事業に大功をおさめたるは其背後に紀藩重役山中筑後守遲美源五郎及社寺奉行兼勘定奉行伊達千廣の庇護ありしによる。（中略）

嘉永六年紀藩執權水野土佐守の爲めに貶黜せられ新宮に幽閉せられ居る事八年餘文久元年赦されて本宮に歸り同年十月逝去す享年七十六　墓碑は菊池海叟の筆になる

尾張連正盛君之墓　俗稱玉置縫殿

文久元年辛酉十月二十三日卒行年七十六（東牟婁郡誌）

六日今はとて立ち出づ。例の女夫坂など險しき路を越えて近露にやどる此處なる野長瀨某が求めにて。

千歳猶有名といふ事を。

仇を逐ふ横矢の功千世かけて貫く氏の名こそ高けれ

かく詠るは玉置庄司が大塔宮を襲ひし時横矢を射て追ひ退けしによりまた氏の

名を横矢とも言ふといへばなり。

註　野長瀬兄弟忠勤の事太平記に見えてゐる。

七日逢坂山こゆるほど雨ふりていとわびし。此山路に石屑多しこれをくづれ沓と言ふそをいかにととふに此山の石いと弱くかけやすくて草鞋の雨にあひてくづるるやうなればなりといふ。いとをかしき名にもあるかな先にうぐひあたりにて白折といふ事のをかしかりしを今又此もいとみやびたり思ひかけず浦人山賤によき詞ををしへられて。

海山に言葉の幸を得たるかないざつとにして世にちらさばや

此山路のみならずきのふの道にても駕よぼろの足とくして直走りにはしるのぼ

りつくだりつ險しき坂なれば危きのみならず駕の内どよみてなゐふる如し木曾殿の車の中もかくもやありけんほとほと倒れぬべくおぼゆれば、少しよどめよ堪えがたしと云へばをゝと答へて二足三足ばかりは心すらめやがて又走り行く怪しき足疾き鬼かなとはては腹立しくなるものからつら〳〵思ふにかく險き路を急げといはゞ困ずべきをさはなくて健かなるは事に當りていと便りよき事なり更に〳〵むつがるべき事にあらずと思ひ返しながら。

逢坂やのぼる山路のくづれ沓くづれやすらんおもむろにゆけ

後にきけばすべてこのあたりの人は山路をゆく事速かなり。さるからに平地をゆくにはとかく足を損ふといふ其故は生れながら常に山路をのみあゆめば自ら足高くあがりて險きに馴れたり里に生れたるは平地になれて足直にのびて高くあがらず此けぢめにて里人は山路になやみ山人は平地に困ずといふ。うべ何事も習

によるなりたゞ山路のみならず世わたる道も苦しきに馴れたらんにはさてあるべし。汐見坂のぼるほど雨はれて見渡しよし。

八重山を雨になづみし心さへ夕日に晴れて海をみるかな

田邊にやどる。

此所の知事殿對面たまはらんとあれば參る。ねもごろに物がたりし給ひて何くれと物たうべける中に古屋谷の石は此君しらす處に出づる石にて諸越にも比類なきまで世にもて榮す石なり兼而深く好めるものなればよろこびいはん方なし。此濱邊に牛が鼻と云ふ岩山あり洞ありておかしき所なり此石にも洞ありて形いとよう覺えたればやがて牛竇と號けて机が嶋の鎭とすこは家に歸りての事ながら因に書き記るすもめづる餘の筆すさびなり。

いでや我先に事に當りてここに十とせばかりこもりて侍りしほども此殿の厚き御かへりみにて事なく多くの年月を送り其後事直りて今既に九とせばかりにして心に隈なく此處に遊びかく知事殿のねもごろにもてなし賜ふ事のかたじけなきに思へば人の世ばかりあやしくはかりがたきものはあらずなん。

今日や夢昔や夢と辿るかな我身や夢の胡蝶なるらん

ついでに御覽ぜさせてよと繁里に聞えおく。

此處の海を牟婁の大江といふ南北はるかに出崎ありて廣く平けき大和田なり。うらうらと霞わたれる春の日に舟こぎ廻らばいかばかりか面白からん。往年ここにこもりてありし時、この海邊のけしきよしと聞きて罪なくてみんといひしも白

波のかゝる渚の月にやありけむと歎きしを今は誠に罪なくて見る事よと思ひつゞけて。

心ゆく海の面かな白波のたちがたき世となになげきけむ

註　此所の知事　安藤直裕侯　田邊藩第十六代の主父は第十四代直則母は三浦氏文政四年十一月八日を以て生る。生母は直裕の生れし日を以て歿し繼母妙敬院夫人の手に養育さる初め裕之助後直承更に直裕と改む從五位下飛彈守に叙し紀藩執政となり征長役には石州口の先鋒總督となり田邊にては和歌漢詩の會を開きて文藝を奬勵せり錦城と號し墨竹の畫をよくす後ち東京に移住し明治十八年四月五日歿す享年六十五（田邊町誌）

註　古谷石（フルヤイシ）　古屋谷石（フルヤダニ）　瀑布石　牟婁郡芳養莊古屋谷日高郡南部莊瓜谷桑谷等に產す形狀種々あり大低石質硬く古銅器の色の如く光澤ありて黑褐色山巖數重或は白條ありて瀑布の如し又幾雪の如きもあり人工にあらずして自然に山谷の形勢殆ど眞に迫りて雅趣あり盆山に用ふ（紀伊續風土記）文人殊の外に賞美し幾多の詩歌がある。

註　牛が鼻　芳養堺の道の傍にあり一大巖小山の如くにして中央穴ありて貫通りて道をなし形揚土門の如し高二間餘廣さ五間ばかり堅徑三間餘（紀伊續風土記）

註　牟漏（むろ）の江　古來の歌枕である。

大寶元年辛丑冬十月太上天皇持統天皇熊野御幸之時紀伊國之歌十三首の內

わがせこが使ひ來んにかと出立のこの松原を今日か過なん（萬葉集）

紀の國の室の江の邊に千年にさはる事なく萬にかくしもあらんと大船の思ひたのみて出立の清き汀に朝なぎにきよる深みる夕おきにきよるなわのり深みるの深めしこらをなわのりの引は絕ゆとや里人の行のつどひに鳴く子なす行とりさぐり梓弓ゆはらふりおこししのきはをふたつたばさみはなちん人し悔しも戀ふる思へば（萬葉集）

風莫の濱の白浪徒らにここによりくる見る人なしに（萬葉集）

あすよりはかつを釣るべく牟婁の江の南の風に松の花散る　（能代繁里櫻蔭集）

日高に歸れば人々喜びて寄り來る。かの朝陽社の一部は歌の圓居せんと小竹神主の家につどふ歌あまたなれば別にしるすべし今度は瀨見善水が江川の家にやどる此近き處に山あり千曳（ちびき）といふ日高川に臨みて面白き山なり名も宜しきを歌によめる人もなきにやさる事も聞えねば今是を望みて。

動きなき吾が君が代のためしには千曳の山ぞ曳くべかりける

ここに三日ばかりありて湯淺にかえる。例の海叟來りて語らふ程に夜も更けぬめり海原はるかに晴れておもしろく冴えわたれり。

波の音も心にすみてくがたちの湯淺の浦の月を見るかな

ふりおほふ霜かとばかり苫舟の白きを見れば月ふけにゝ

註　小竹（しのう）神主　八幡宮、日高郡薗莊薗に在り莊中の氏神なり當社舊は村の北十町ばかりにあり延寶六年此に遷す此地は舊南龍公の御殿跡なり祭禮に戲（けはんおど）踊りと云ふ踊りあり其文頗る頗すべし其文中四恩の句に香嚴公御證解の御書あり太鼓細腰鼓鉦にて老人瓢團扇其他種々のものを持ち作り花等を頭にかざして歌舞す老人のかゝる踊りをなす事奇といふべし近年一位老公親筆の小竹八幡宮といふ五字の額を賜ふ（紀伊續風土記）此八幡宮の神官小竹（しのう）昌安

註　千曳山　俗にせんびき山と云う和歌山縣日高郡丹生村大字江川と野口村境にある岩山にして小松茂り居り往古千匹づれの猿の居りたるより千匹と云いそめたるを千曳の字をあてたるものとおもわる。

註　日高川　娘道成寺の清姫が蛇となりしと傳うる川。源は山地莊在田日高二郡及び大和國界の山峰に發し寒川川上と矢田岩内四莊を歴て山田莊北鹽屋浦にて海に入る(中略)海口北鹽屋浦より山地大和堺まで陸路二十一里に足らずといへども川流に從うて屈曲すれば四十餘里に至ると云ふ（中略）舟揖の通ずるは川上莊瀧本村まで僅に七里ばかりといふそれより上流は僅に瀧舟といふを造りて用をなすと云ふ（紀伊續風土記）

河春月　　長澤伴雄

うら〳〵とかすめる春の日高川暮れてゆく瀬に月ぞうかべる　（湯峯溫泉日記）

あくればここを立ち出で宮原といふあたりをくるに世に聞えたる阿氐（あで）の橘は此あたりの山に殊に多き處なり。此みかんはむかし我藩の祖君遠く肥の國八代の木種を移植させ賜ひしに所得て年々に生じけりつひに天が下に名高くもてはやす事となりたるはいと〳〵めでたき例なり往年よめる歌あり。

香具の實の八重かさなれる阿氐山は黄金をつめる神の御倉か

今も見わたせばやゝ色づきてまことに黄金の林とたたへつべし。

植足して殘したまへる香具の實に山照る光仰ぎ見るかな

抑々此木の國は木種まかしゝ有功の神のしろしめす國なりかく八十の木種に數そへてうまし木の實のうまはりゆくを神もさこそは愛で賜うらめ。

橘の花さへ實さへとりよろふ君が御いさを神もめづらん

若山にかへりつきたるは神無月の望のたそがれなり。

註　宮原　宮崎に對する名なれば須佐神社の在す地にして廣平の地なるを以て宮原と云ふなり（紀伊續風土記）

加納諸平

橘薫風

木の國の在田縣の山縣に新に生たる常世物花立ばなの時じくのかぐの木の實は天が下四方の國內に人皆のめでにめづとふ木實のみしかめづべしや此花の咲のををりの香をこそはめづべかりけれいはまくはあやしかれども早苗とる比にしなれば東雲の朝々と明けわたるあしたの風の海原を吹のたゝみにあら潮の八百會をすぎて眉引の阿波の島回にはろばろにかをらひゆくと島人ぞわれにつげつるあやしくもかをる花かも奇しくもかをる花かも春風に梅ちる野邊も秋風に菊咲く谷もかばかりの香りならめや奇しき花の香

（柿園詠草）

なつかしき槇垣のひまに橙の黃なるが見ゆも紀の國に入れば　（下村海南）

昭和十一年九月九日印刷
昭和十一年十月十日發行　三つの山ぶみ　定價金壹圓

大日本根源神
域木國熊野三
山復興祈願記
念發行奉納
那智補陀落山
觀世音菩薩

原記者　伊達千廣
校註兼發行者　井上豐太郎
東京市牛込區鶴卷町
印刷者　池田正登
和歌山縣御坊町
發行所　起雲閣
電話八八番
振替大阪六四七六四番

故湯川胃腸病院長醫學博士湯川玄洋先生題僉序
前大阪朝日新聞副社長法學博士下村宏先生序歌
大阪毎日新聞學藝部長井上吉次郎先生序
紀伊方面郷土研究家數十氏序又わ推奬
井上豐太郎撰著

詳解 紀伊郷土文獻拾遺 第一篇

定價金五圓
送料廿一錢

菊版五百餘頁　口繪數葉入　印刷鮮明最美本　三百部限定版

此書わ著者が自信を以て世に問わんとする撰著で現に殘存せる南北朝以降明治の末葉迄凡そ六百有餘年間に亙る紀伊郷土文獻數百卷中より拔萃したる文章詩歌を年代順に配輯し之に簡明流暢なる文獻解題著作者傳記文意詳解を付し何人にも讀み安からしめたものである。此書わ昭和十一年二月頃出版豫定の所書物倶樂部の秋朱之介なる男に印刷費を横領費消せられたる爲め組版中途にして挫折し居たる所今般苦心の末出版の運びとなりしものである。

和歌山縣御坊町　起雲閣

振替口座大阪六四七六四番

67
483

終